

繪本源平盛衰記全

205062-000-0

特64-559

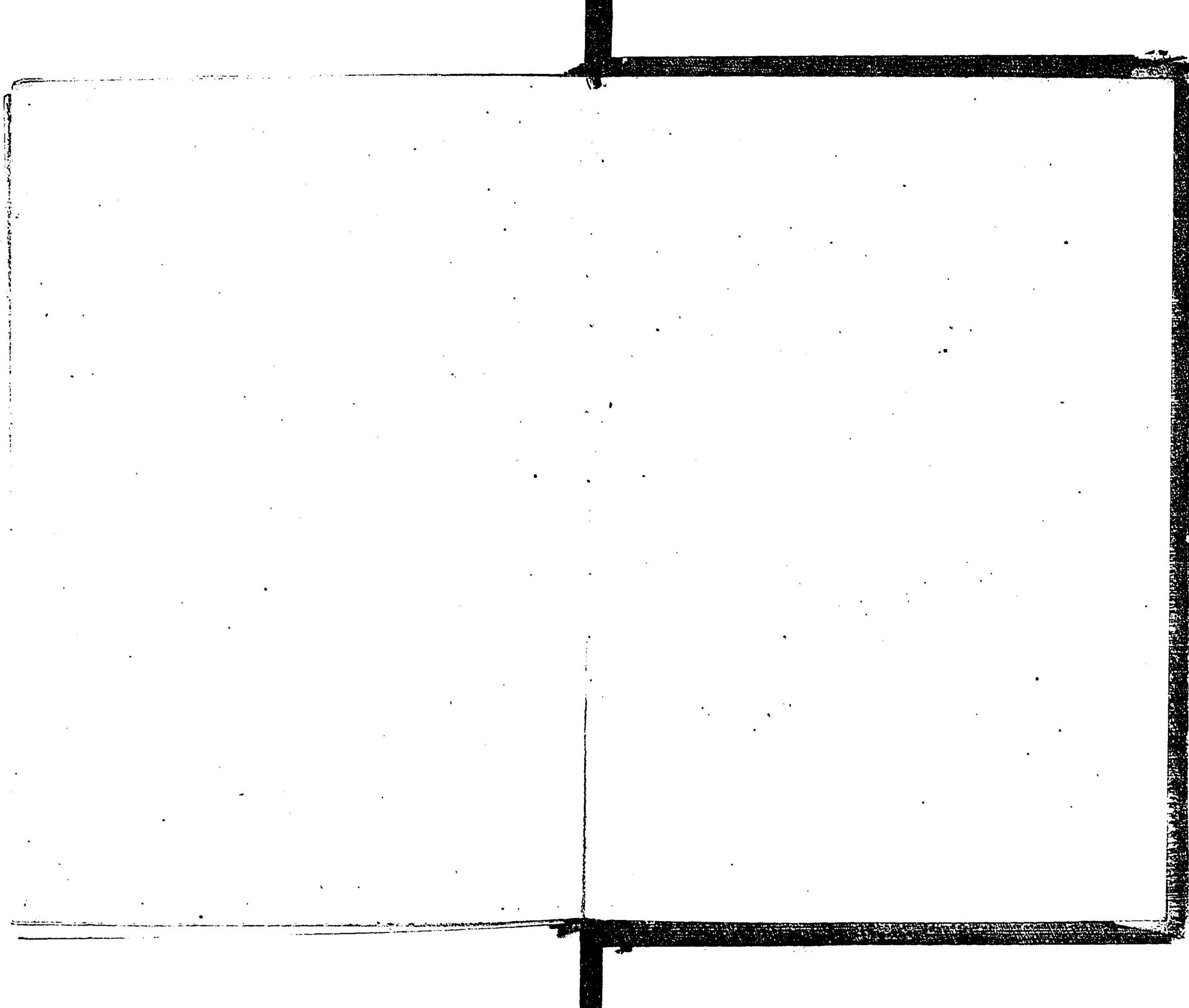
繪本源平盛衰記

平山 菊城/編

M19

EDV-0055





特64 559

道入盛清國相平



明治二十年一月十四日附録有文附 2386









熊谷蓮生坊

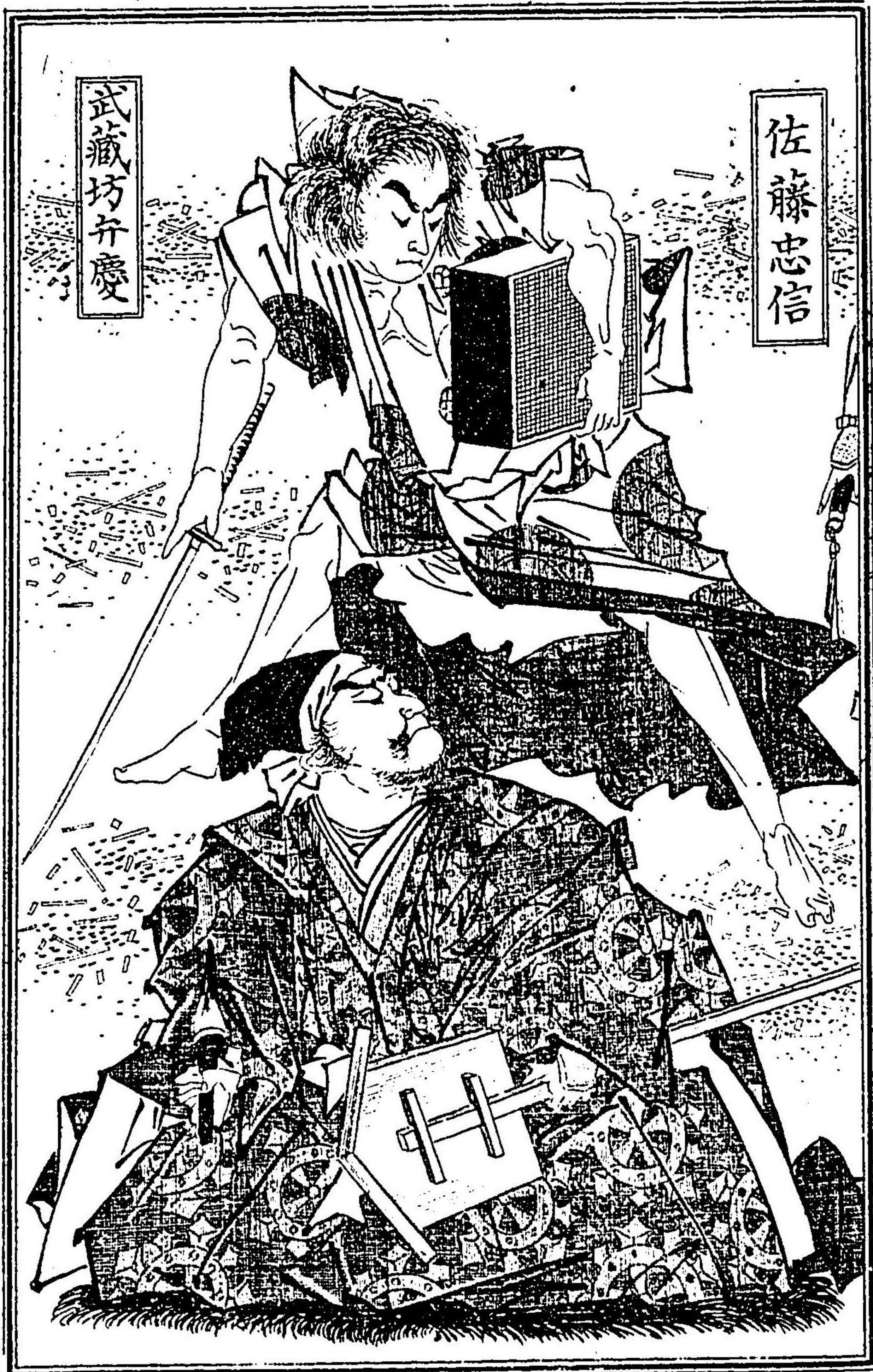


右大将頼朝

佐々木高綱

和田義盛

三河守範頼





繪本源平盛衰記

目次

- 豐明節會
- 清盛侍三百人禿童
- 清盛命武士關白基房公事弊
- 源三位賴政以妙策免難
- 安徳天皇降誕
- 高倉宮出御信連勇戰
- 高倉宮寺門入御源三位軍配
- 忠綱宇治川先陣賴政最後
- 太政入道籠祇王祇女佛前
- 石橋山合戰

- 鱸魚入船
- 詔立二代皇后
- 鹿谷密謀
- 依行綱訴鹿谷密謀露頭
- 賴政高倉宮奉進御謀逆
- 滝口競以謀誑宗盛卿
- 宇治橋合戰淨明一來著名譽
- 高倉宮的流箭飛去
- 文覺授平家追討院宣賴朝
- 佐奈田保野組討

- 賴朝卿隱卧木助梶原佐殿
- 賴朝卿催軍勢降參大場景親
- 平家驚水鳥羽音逃登京都
- 木曾義仲揚義兵
- 俱利伽羅嶽源平對陣
- 平家落都
- 賴朝賜征夷大將軍宣旨を奉い
- 巴女力戰殺内田家吉
- 鷲尾標一谷鶴越
- 源義經落鶴越
- 熊谷討敦盛并平家公達討死
- 梶原逆櫓論

- 大場馳早馬太政入道申官符
- 平軍寄富士川西岸真盛敵美語
- 義經求賴朝陣前誅大場巳下
- 源氏追討使彈經正竹生島琵琶
- 真盛討死
- 木曾狼籍燒注寺御所
- 高綱宇治川先陣
- 木曾義仲於栗津死
- 生田森梶原二度駈
- 知盛乘船知章代父命
- 盛綱馬上渡藤戸海
- 那須与一射扇

- 景清美尾屋鬪鏖
- 源平遠矢
- 頼朝義經不和
- 土佐防堀川夜討
- 忠信謀吉野衆徒
- 判官義經北國落
- 源義經渡蝦夷

以上五十八題

- 佐藤繼信忠死
- 能登守最後
- 源頼朝平宗盛對顔
- 義經落都
- 忠信戰死
- 義經入高館城
- 法皇大原御幸

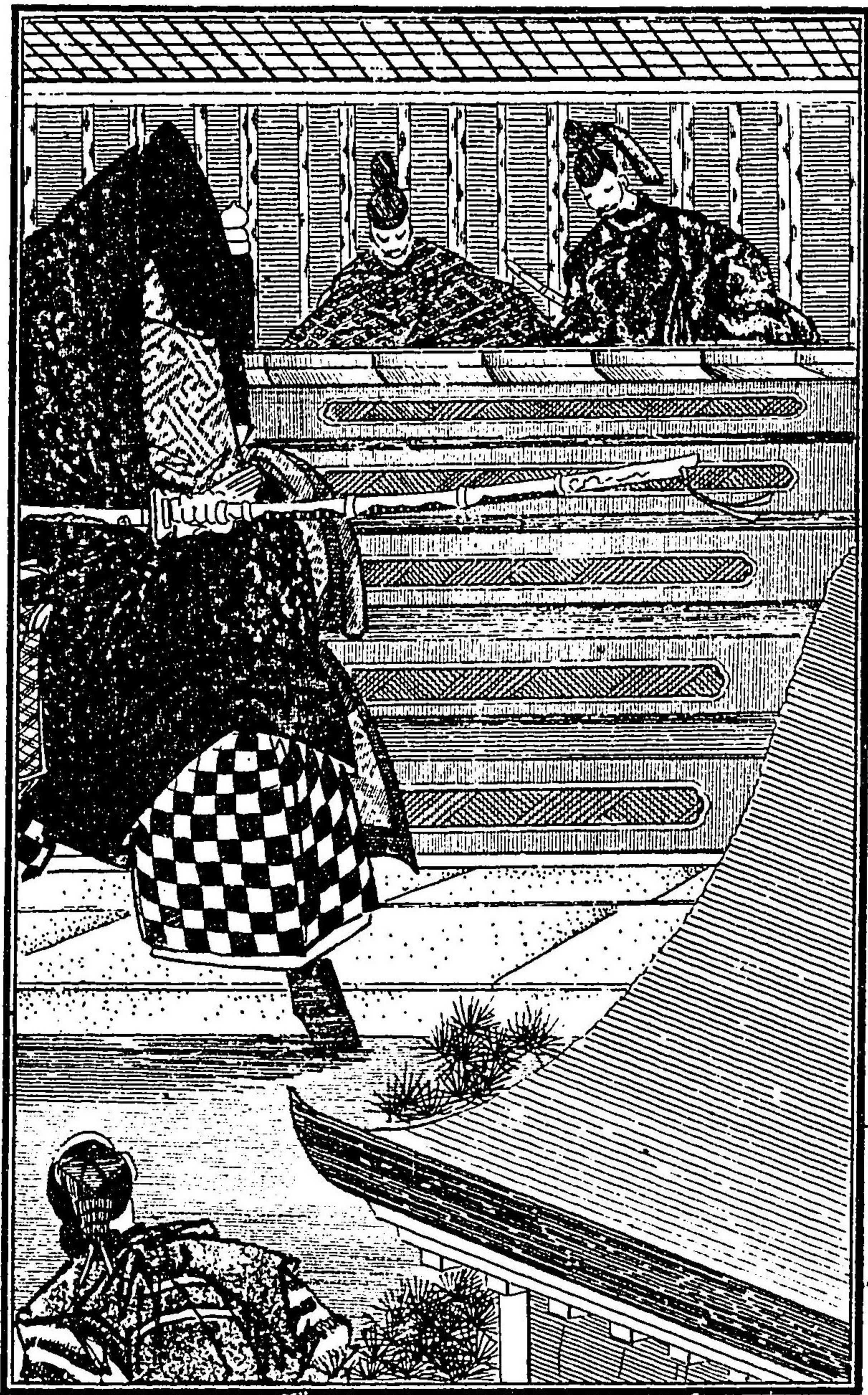
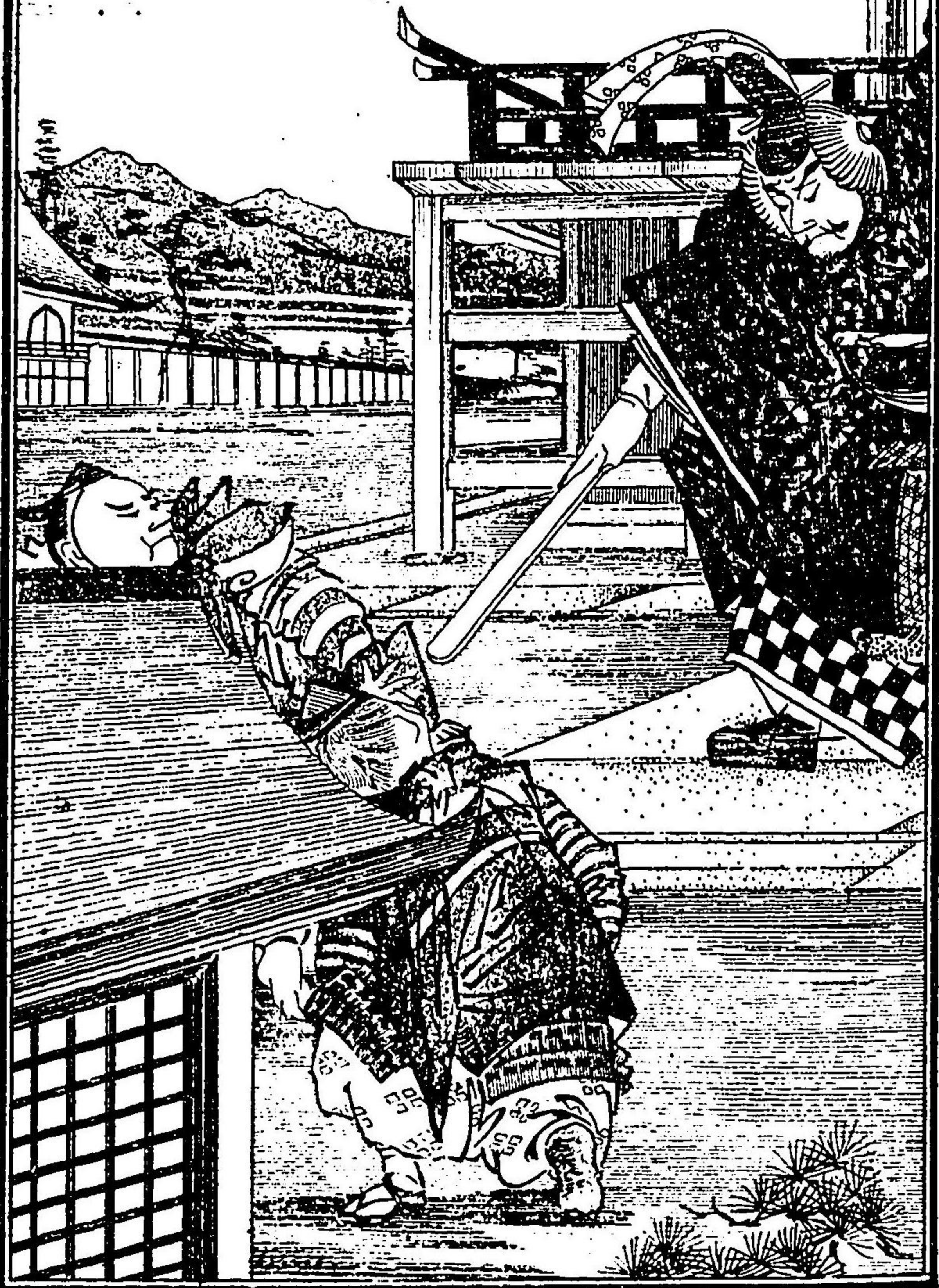
目次畢

源平盛衰記圖會卷之一

豐明節會

王風哀以思周道蕩無章卜洛易隆替興亂固不亡力改吞九鼎と張子房が詩を謝膳ら  
 作れるも實なるか夏寒泥秦趙高漢王莽采周伊唐祿山み先皇の政も隨はず  
 民間の愁をも顧みず騷擾速り來つて久しうらずして滅びよき我朝も承平の  
 將門天慶の純友康和の義親平治の信頼等なり此頃太政大臣平清盛といふ人あり  
 桓武天皇第五皇子一品式部卿葛原親王九代後胤讚岐守正盛孫刑部卿忠盛の嫡男  
 あり此親王の孫高望王の時寛平元年五月十二日に始て平の姓を賜て上総助に成  
 結ひしふり已來忽地は王氏を出て人臣に列る其子鎮守府將軍良望後は常陸大  
 丞國香と改む國香より貞盛經衡正度正衡正盛に至まで六代に諸國の受領たりと  
 いへどもいまだ殿上の仙籍を許れず忠盛朝臣備後守たりし時鳥羽院御願徳長  
 壽院とて鳳城の左鴨河の東は三十三間の御堂を造進し奉一千一體の觀世音を安  
 奉り此勸賞は但馬國を賜ふ其外結縁經營の人々より程々は隨て勸賞を蒙る誠  
 は大善根とぞ覺たり忠盛朝臣佛智は協小程の寺を造進したりけれは鳥羽法皇  
 殿感し耐させ結はず當座は刑部卿に仕せらる大内の昇殿を許さる昇殿ハこれ象

忠盛を以て  
計を免る  
危る



外の遷ふれを俗骨望む事ふし就中先祖高見王より其跡久しく絶たりしは忠盛三十六歳にして許されけるに當家の面目子孫繁昌の驗と見へたり法皇常に宣ふは忠盛ふからましが誰かハ朕をハ佛に成べきとてある時ハ御劔御衣或時ハ沙金銀絹を徳長壽院へ回向し奉つるとして下り結びけり其上關國のあれかハ庄園のあれかし重ねぐも賜らんと思召けれハ雲の上人嘲憤つて議し申されけるハ長承三年十一月廿三日五節豐明節會の夜忠盛を闇討しんと支度區より忠盛此事を風よ聞て武勇の家小産て此恥に逢ふ事身の爲家の爲ハ心憂るべし又此事を聞ふら出仕を止らんもいひ甲斐ふし所詮身を全して君ハ仕ふるハ忠臣ことと郎等左兵衛尉家貞を連て参内せらる家貞ハ布衣の下ハ萌黃の腹巻衛府の太刀を佩鳥帽子引入袖纏り殿上の小庭より又子息平六家長ハ年十七春高骨太として剛の者ふれハこれハ布衣の下ハ紫威の腹巻着て赤銅作の太刀を佩て無官ふれハ徐々として左右の手を土小附て大居小成雲透殿上の方を焼て父の家貞ヤツト云ハ家長討入べき氣色也頭左中辨師俊朝臣藏人判官平時信を召て宇津保柱より内に布衣右候ぬるハ何者ぞ事の体復籍ふり罷出よと云せけれハ家貞答て主君忠盛今夜闇討しせらるべきよし承ハハ其様見奉らハヤとこハ小畏て候アハヤと云ハ堂上

までも切登るべき煩魂と見へたり殿上ハ忠盛黒鞘巻の大大刀を裝束の上ハ横とへ腰の程差排とる様にして柄を人々よぞ見せよける殿上人此支度ハ惶て其夜の闇討ハなかりけりいまだ五節の御遊も終らざるは退出の次ハ火の暗き影よて太刀を拔出し髭の髪よすらりくと引當けれハ火の光ハ耀きあたりもきらめくをかり殿上の人々皆いよく恐おのゝさける紫宸殿の後よて主殿司を招よせ腰刀を鞘ふからぬき後ハ必ず味あるべし槌は預んとて出まけり家貞主を待受ていりぐと申上げけれハ有の儘ハ罷らハ備事すべき者ふれを別義ふりと答給ひける五節の後ハ公卿殿上人一同ハ奏せられけるハ忠盛いまだ雲上の交りを知らず殿上人とる者脇刀を佩事傍若無人の振舞也雄劔を帯ひて公庭より列り兵杖を賜つて宮中を出入する事ハ格式の禮を定とり然るハ忠盛の郎等として和衣の兵を殿上の小庭よ召寄せ其身ハ腰刀を横たへて節會の座より列す希代の狼籍也早御札を削て解官停任せらるへきよ申されたり上皇ハ群臣の列訴ハ驚き思召て忠盛を召て御尋ある其答ハ郎從小庭より伺公の事且て存せず察するハ人々仔細を相企らるハよ其間あれハ年來の家人其難を助けんが爲ハ忠盛ハ知せずして推參致す條罪料聖斷あるべし次ハ刀の事主殿司ハ預置候石出され其實否ハ依て谷の左右あるべ

さりと奏しければ誠は其謂あらんとて件の刀を召出して敵覽ある小黒漆の鞘巻  
中ハ木太刀小銀箔を押たり當座の難を遁ん爲小横たへ差たれども後日の訴を恐  
れて木刀を構たり上皇これを見ぬ急難を免る智慮の謀計神妙也郎従小庭の推  
参武士の家ハある習ひ乎存知ふき由申上ハ忠盛が答ハあらずと却て敵感小預  
りけり

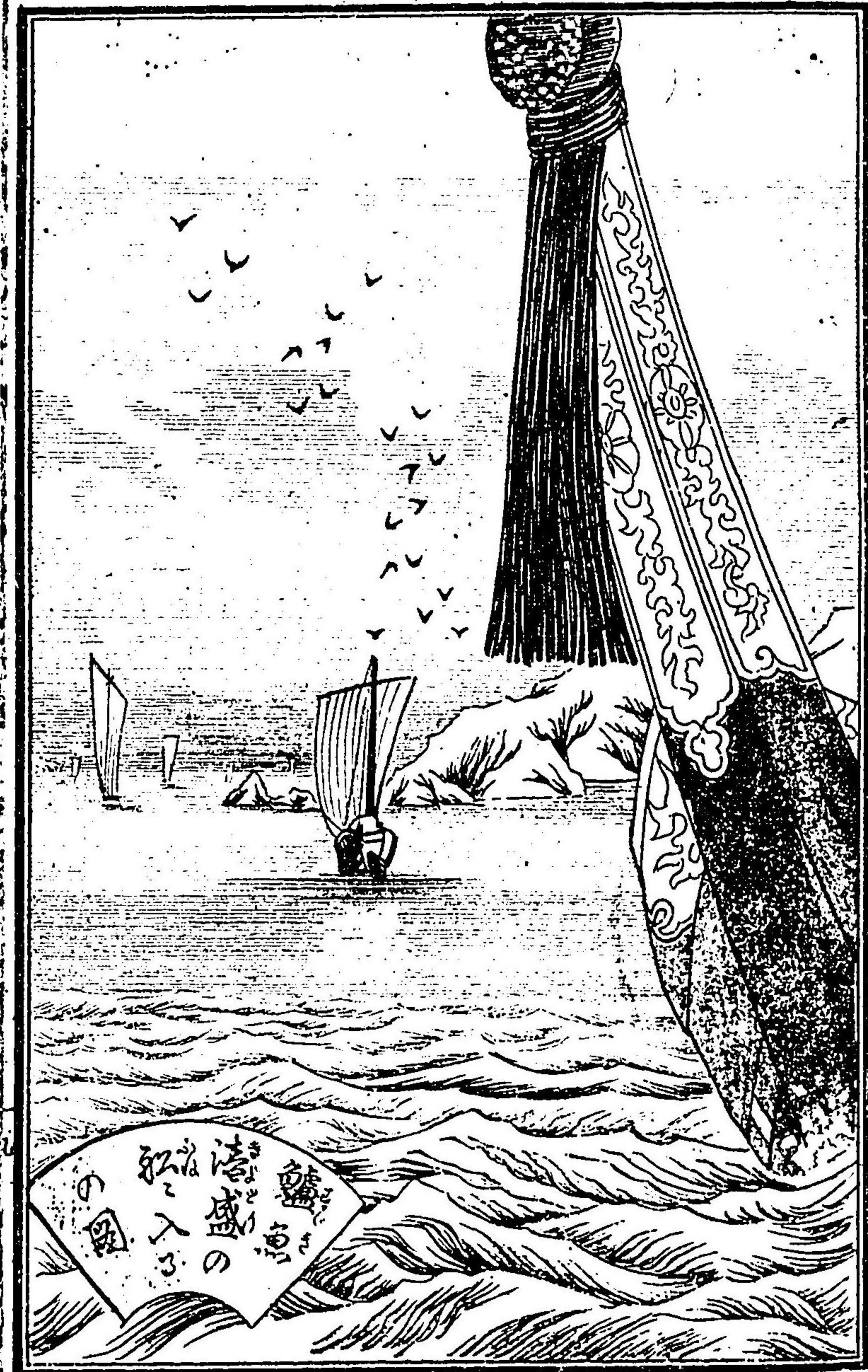
鱧魚入船

平忠盛ハ桓武帝の苗裔よして王氏を出て遠のらざれども中頃ハ無下に打下りて  
官途も浅く都の住居も疎々しく當ハ伊賀伊勢にのみ居住せし人ありハ此一門を  
伊勢平氏とぞやける忠盛朝臣の子息多くありき嫡子清盛二男經盛三男教盛四男  
家盛五男頼盛六男忠重七男忠度已上七人皆諸衛佐を経て殿上の交りあり該ハ云  
男子七人ある時ハ長者とて人多く羨みけりこれハ徳長壽院の御利生とぞしられ  
たり但し命ハ限ある事ふれハ近衛院御宇仁平三年癸酉正月十五日忠盛行年五十  
八歳まで卒しけり猶も盛とこそ見へしは春立霞またぐひ雲井の煙と消上り指た  
る病もふく精進潔齊して睡の如く終焉せらる見る人聞人も惜まざといふ事ふし  
女子五人男子七人有て清盛嫡男ふれハ其跡を繼諸國の庄園を譲るのみ小井家

藏の重寶相傳して他家ハ移す事ふし中よも唐皮といふ鎧小鳥といふ太刀清盛ハ  
授らる又坂丸ハ頼盛當腹の嫡子ふれハこれを傳ふ其事よりて兄弟中睡のらざ  
とぞ聞えし柳清盛益繁榮しぬひける事ハ若年の時阿闍梨祐眞の教ふて大威徳明  
王の法を行ひ七ヶ年ハ滿夜明王示視ありて

勤んと思ふころのきよもりの花も咲つゝ朶も榮ん

とあれハ清盛たのもしく思ひて愈精進祈念しける其頃毎夜南殿の上ハ化鳥徘徊  
して聲をなす藤待従秀方折ふし當番はおハける殿上より高聲よ人ヤあるく  
と召れけり清盛こそ小伺公と答ふ南殿ハ朝敵あり罷出て櫓よと仰ける清盛化鳥  
の音小付て墓目の術を行ひ一ハバ此鳥清盛が左の袖の内小飛入る即取て進りけ  
り人々是を見れハ鼠の切輕さるふて毛勝といふ者也南臺の竹を切て中ハ籠て清  
水の岡小埋れさり帝の御憚も平愈まりくければ勅使を立られ宣命を合れこれ  
を毛勝一竹塚とふづく清盛の勸賞ハ安藝守となさる此時清盛伊勢國阿野津よ  
り船にて熊野へ参れける小大なる鱧の船へ跳入とりけれハ人々やけるハ昔周武  
王の船よこそ自魚ハ躍入とると聞ゆいかさまにもこれハ権現の御靈瑞と覺候精  
進潔齊の参詣なれども自調味して家子郎等よも喰せぬひける清盛安藝守より播



磨守は移り太宰大貳に任ず平治元年信賴卿叛逆の時勳功ありて同き年十二月廿七日経盛ハ伊賀守頼盛ハ尾張守宗盛ハ遠江守重盛ハ伊豫守教盛ハ越中守基盛ハ左衛門佐に任ず其頃清盛ハ永曆元年正三位より参議を拜す同き二年右衛門督檢非違使別當權中納言に任じ長寛三年小権大納言に至り仁安元年内大臣兼小任じて宣旨拜小鬻祿なりりけれども忠義公の例とぞ聞へり同二年小太政大臣より上る左右を經すして此位に至る事九條大相國信長公の外先跳ぶ大將小ありぬとも兵杖を賜つて隨身を召具して執政の人の如く輦車に乗て官中を出入す偏に女御入内の儀式也太政大臣ハ訓導の禮重く儀刑の寄深けれハ地勢大ふりと雖も賢慮足されハ其仁に當る事なり天才高しといへどと政理明ならざれば其器はあらず其人に非ずして汚べき官小あらざれども一天の安危身は由萬機の理亂掌小ありけれハ子細小及ず一門の親族大國を賜り一品の階級まで九杖の先蹤を越奢修日増榮花月熾ん也ける小清盛仁安三年十一月十一日齡五十一にして重病に侵され存命の爲に剃髮す法名を靜海と名のる其驗はや宿病立處に平愈して天命を全す威勢は惶れて世の人從ひ付こと風の水草を靡ぐ如くとく雨の山野を潤す異ならずされハ六波羅の親族公達といへハ花族も英才も面を向へ肩を

双ぶる人ふかりけり

清盛侍三百人禿童

太政入道清盛の命として十四五才若ハ十六七計ふる禿の髪を首の廻り切つて三百人召仕れける童小もあらず法師小も非ず一様長絹の直垂を着る時ハ裾の布袴を着せ又一色は織物の直垂を着時ハ赤袴を着させ梅の枝染の三尺才ふるを手にと白く汰て右に持鳥を一羽づつ鈴付の羽小赤符を付て左の手小すへさせて面々小持せて日毎小遊行さしむ是ハ靈鳥頭のみさき者として大會宴の珠童を真似れたり又ハ耳聞也これハ若靜海があさりに意趣あらハ忽緒小云者あるへり其者を聞出して申上は相糺さんとの仰なれハ京中の條里小路門々戸々小耳を時聞すまして訴けれハ咎ふき者も多く捐けれ入道殿の禿とさへいへハ馬牛輿車ふとまでも道を開て通しける通路次ハ往遇小輩ハ御幸行啓に参り會たる様は手をつき腰をうづめて走除てぞ過行ける此禿等ゆ事ハ善惡を糺さず入道許容しぬひけはハ貴賤共追從して善も惡も平家の事ハ云ず又禿は惡しと思ハれたるものハ入道殿に議せられて科ふくして多く損する者も有けり又禿一人よても關する時ハ入立て三百人を極らるる梅の枝染鳥の持やういか様よも深き思慮ある事よやと

ぞ私語ける昔唐よ八葉大臣とて天下小聞ゆる賢臣にて罪を輕し賞を重く民を憐  
事堯舜の政化よ異ならず此如く禿童を多く揃て金歸鳥といふ禽を持せて國々巷  
々よ徘徊させて萬民の愁歎を天聽に奏せよ直に善政を行はんと有けれハ愁を殘  
す者もなく恨を合者もなし國豊よ民恨んで政徳海内小及はしけりされハ是をバ  
善者の童と名付たり今の童ハ事ハ觸れて物の煩多けれハ惡者の童といひつべし  
漢家本朝上古末代善惡ハ變れども權威ハ劣らず入道福原よありける時賀茂大明  
神禿に現れて三百人よ打紛れて近習ありけり何れ今童やらん本の禿やらん恐  
しかり一事故也

詔立二代皇后

清盛の娘八人ありけるが皆とりよ幸し給ひたり一ハ櫻町中納言成範卿へ  
相具し後にハ御兄花山院左大臣に進ぜられたり二ハ徳子と名く後に立給ふ皇子  
降誕有後にハ禮建門院申き三ハ六條攝政基實公の北の政所なり四ハ冷泉大納言  
隆房卿の北方成五ハ近衛殿平基通公の北の政所にて衣通姫とぎ呼とける六ハ七條  
修理大夫信隆卿に相具し給へり七ハ後白河院へ乗りて更衣の后にておハける  
八ハ大納言有房卿北方成斯く一門廣く繁昌し給ひけるにや大日本六十六ヶ國に

平家の知行三十餘國に及べりとぞ

清盛命武士関白基房公車弊

永萬元年七月新院崩させ給ひりつハ天下諒闇にて御潔大將會も行はず雲の上人  
花の袖も容々れハ皆愁傷の思ひなり同十二月二十五日建春門院の御服に五歳に  
ならせ給ふ皇子に親王の宣を下されたる同三年八月に政元有て仁安といふ同二  
年二月十九日高倉院御年七歳にて御即位あり是皆入道清盛の計いよて新帝御位  
に即き給へハ愈平家の榮とぞ見へ一國母建春門院ハ太政入道の北の方二位殿の  
妹にてハたらせ給へハ斯て平家の奢り日小月小昇りなれハ嘉應二年法皇法勝寺  
御行あり一御供に撰録基房公の糸り給いて殿下三條京極を還御なり給ひける小  
三條表小女房車あり夕陽の蔭に車の内透通りて鳥帽子着たる人乗りたりなれハ  
牛飼舎人等車より下すべきよ責なるに聞入りにてやり過さんとしけるを撰録  
なりとて前の簾を切落したる内にハ太政入道の孫重盛卿の次男資盛の笛を習ん  
とて式部卿大輔雅盛の家へ行ける資盛の乗居けれハおのよ一父の小松殿小申し  
けしハ御出に糸り會て車より下りさりたるおそ不敬なれと教訓せられき此騷動  
太政入道の耳小入りて大小噴り難波瀬尾と呼べる田舎侍の強なりき物小い附て





廣谷之舎  
平家とて  
我謀る國

終小関白殿の通行を待伏せ散々根籍なして耻めをあたへるとぞ

鹿谷密謀

新大納言成親卿の大將の官にも成るべきと思ひの外平の宗盛に越られ無念に思  
ひを竊に平家亡さんと兵具お調へ軍兵を聚ける洛東鹿ヶ谷といふ所法勝寺  
の執行後寛僧都の領ふり後三井寺に續て如意嶽高く前洛陽遙に見渡して  
かも民家隔たりふれ九竟の要害也とて城郭を構へて兵杖を用意す攝州源氏多  
田藏人行綱といふあり成親兼て頼ける上海勝寺の執行の檀越小契凌から互  
ひに懇意な水後寛もまきを語ふ平判官康頼近江中納言道蓮海其外北面の輩多  
く同意一なり此人々一日鹿ヶ谷にて酒宴を催し軍をなし區々なる時新大納言  
侍を招て長櫃の中より白布五十端取出しこれを藏人の前に積置て盃を進め平家  
を亡に密談ありなるとなり

源三位頼政以妙策免難

近藤判官師經といふ者有加賀の目代に遣されたる一鵜川の涌泉寺小て衆僧浴して  
聚り一時乱入て彼僧共を遂上げて其湯小我身も浴し雜人原も沐せ馬の湯洗ひま  
でもさせける小よりて寺僧怨つて師經が郎等を故々に打擲せんとに故小師經大

は憤り終小鵜川を攻む合戦及び一か鵜川寺の本寺白山三社八院の大衆悉  
く蜂起して都をさしていざき畷山に登り山門一味して此事を仙洞へ愁訴申し  
たる小其沙汰なく取上給はざる小よつて尚も山門の大衆議して師經を流罪小所  
せらるべきよ一度々訴訟に及ぶと雖も裁許なかりなる故に山玉の神輿振くた  
奉るによつて源平兩家の武士に仰て四方を防たたま小源三位頼政ハ護三百騎を  
もつて北の方達智門縫殿陣を固め給ふに大衆よきを見て所ハ廣一軍勢ハ少一此  
所より立入らんとに頼政急ぎ馬より飛をり甲を脱き手水を遣ひまづ神輿を拜し  
給ひなま兵ども皆々斯の如く其後頼政より大衆の中へ使者を立て云今度山門  
の御訴訟理潤議論するよ余義ふく神輿入奉るべき事子細に及ハばされども頼政  
無勢にして固め得ず能とあけて入衆する所より入せ給ハ山門の大衆ハ目た  
り顔一なりなど後日京輩の申さん事も如何候此所たやすく明て入奉らんとす  
れハ宜旨を皆小似たり又防き申さんとまきと醫王山玉の御罪も恐れあり彼と云  
ひ是といひ身小とつて危難こま小まかじと妙計をもつて山門の大衆を事なく他  
の陣へ歸したるハ偏頼政が智略ふりけるとぞ

依行綱訴鹿ヶ谷密謀露頭

新大納言成親卿ハ山門の騒動によつて謀叛の支度ハ暫止よける多田藏人行綱ハ弓袋の料の白布を直垂袴など裁縫せて家子郎等に着せつゝけく思案をめぐらし今平家の繁昌を見る小當時頼朝さかじ成親卿のかさらい給ふ軍兵權なれ由なき事よ與りて若頭れふハ誅せらさん支疑ひなし甲斐なき身小も命こそ大切なれと福原よ下り平相國に斯と訴人ふたれ治承元年六月二日新大納言成親俊寛僧都入道康頼丹波少將成経ハ薩摩國鬼界島へ流され給りぬ然るは康頼入道都のこひさふぬさらふり待よ七十余の母の紫野に在たるを思ひ出でいと詮方なくぞ思ひける初流されし時斯と知せまほしく思ひ給へども聞まべりなハ聞焦給へん事のかなしさよかくとも告びて下りたれば存命て今迄もおはせハ此様を傳に聞て以の才りかハ歎き給はんなど口説てかふさのあまりふかくと思ひつげけたり

薩摩瀧沖の小島よほまありと親よ告よ八重乃汐風右の詠哥を卒都婆う記し千本の数を海に投し給ひたるが其卒都婆いつくまよ流よより終よ都の母居は通しなるよ

○安徳天皇降誕

治承二年中宮建禮門院御懷任まゝ々々御安産の御禱として都而神社は御願を立ちるし夏ハ加茂石清水社より始め新西宮東光寺に至る迄四十一ヶ所佛寺よハ東大寺興福寺より常光圓明院七十四ヶ所の御誦經有治承二年九月十一日侍賢門院御産の例よよりて今度鬼界島の流人少將成経入道康頼を始めとして諸國よ於て七十三人追宥されたり然るは俊寛僧都ハ一人其島の島守となり果て事訪人もなかりなる爰よ俊寛僧都の世よありし時めし仕ひたる童三人栗田辺よあり兄ハ法師よ成て法勝寺の一の預なり次男ハ龜王三男有王と申しハ鬼界の流人婦洛のよ一聞て迎よ行とりよ人の語りたるハ二人船よ乗さまひし小俊寛僧都ハ船よとりつきなげさかふしみ遙の沖へ出給しは陸の荒き所よ上りて聲を上げ我をも逃れて上り給へ責て向ひの島也とも濱の直舩に倒し給ふと語りたる小そ有王聞て涙を流し偕ハ未だ此世よまよまよと只一人船を出て波路遙よまよ火のつくしの果の薩摩瀧硫黄ヶ島へ遙々とまよ思ひ立つ奈良よまよまよ僧都の姫君の許よまよいりて御文を賜り卯月の末よ便服を得て海士ら浮木ふうきの旅波風心よまよせぬこうかり夏多かりさされども佛神を祈り主の見参よ入らんと志よいて行程よ口数も漸くりけれハ鬼界島江も渡りたる此島の分堅ハ都よて傳



聞くよりも恐ろしく峯はもへよる烟所々見へ谷は地鳴響て行客の魂を消旅  
 人のゆめを破る山浴は日暮さぬれとも樵歌牧笛の音もなく海岸は夜を明せば松  
 風白浪心をいさまりむ有玉は只茫然としてぶぐさむ思ひふかれはいかすべき  
 とも覺に主の行衛をこそねんと谷へ下り岩もる水は袖は濡し嶺に登ては松吹風  
 は身も疾れ泪を流して休ひける去程は島の住人と覺りて木の皮を髪として額  
 は巻き赤裸よてむくつけき身には毛太く生て長は六七尺をかりふる者ぞ過たり  
 なる有玉嬉しくていひける此島は法勝寺執行僧都の御房をまじはれ何所にて  
 候かふと問われは只打見たるばかりよて物を言さざりけり法勝寺とも執行と  
 も争かいらさぬれはこそへざるも理ふり最早空しく成さまふならはせめて其骸を  
 尋ね得て形見ともするふらたこゝるざりの甲斐ともなるへき御行へたよもいら  
 ずして空しく都へや帰らんかふふいさよと思ふて猶深く山路は尋ね入り終は俊寛  
 僧都よめぐり逢ひさてまつり僧都の終り見届さてまつりたる実是有玉の忠節と  
 いふべし

○頼政高倉宮奉進御謀叛  
 一院後白河法皇第二の皇子以仁王と申ハ先帝高倉院の御兄よてまじはれ御母ハ

春宮太夫公實の息男加賀大納言末成卿の御女とかや三條高倉はおはりませぬ高  
 倉宮とぞ申ける去る永萬元年十二月十六日御歳十五と申ハ大宮の御所よて忍び  
 で御元服ありしが既ハ三十歳に成と給へども親王の宣旨もふく只簾中よりつく  
 とりて御ハハに然るは治承四年卯月九日夜人定而後源三位入道頼政潛ハ此官  
 の御所よ乗りて申けるハ君ハ天照大神七十七代の御苗裔太上法皇第二の御皇子  
 よてとさらせ給へハ太子よも立帝位よも即と給ふべきは親王の宣旨をぞと御許  
 なくて既ハ御年三十路に成せ給ひぬ御心憂ハと思召候はずや平家の榮花身よあ  
 まり積悪年久し運命末よのぞめり子孫相續して朝ハ仕ん夏年久しからト當時い  
 のなる御計策なくハいつか期させ給ふべき慎過させ給ふとも終ハ安穩よもて  
 させ給ハん夏も有がさし物盛んよして衰へ月みちて飲るこれ天道也義兵を擧て  
 逆臣を討法皇のえいりよを慰奉群臣の怨讎を解ん夏專此時は有日を経へらば  
 急ぎ今旨を下され早く源氏の軍勢を召るべし頼政七十有餘年關ハ侍へばともし  
 息家人数多侯得ハ一方の御面とたのもしく思召るべし悦をふして馳来する源氏  
 等國々よ多く候とて語り列ね進め奉りなほ宮もいつしか其意よ従ハ新宮十郎  
 義盛を以て今旨を諸國の源氏へ下給ひける

○高倉宮出御信連勇戦

高倉宮御謀叛を太政入道清盛風は聞き給ひけきを永暦元年は斬へかり頼朝を助けをき今かゝる大吏となる所詮東國の馳登らぬ前宮を土佐の畑江流奉るべしと定められぬる此夏源三位入道の子息兼綱公の早く知り給ひてかくと宮は告げ奉り奉れは家臣長谷部信連承り宮を女房の姿に出たせ夜はまきれ三井寺へ落しまいらせ自分とあとと残り止り宮人の宮を迎は奉らんとす光長兼成の兩人相人よをけしきたいかい虜と也一後も命助り平家滅亡の後再び鎌倉殿にめされて恩賞受り古今稀なる英勇ふりなる

○龍口競以謀証宗盛卿

高倉の宮は五月十四日京都を落させ給ふて終夜三井寺に入らせ給せ々々同世日は源三位入道嫡子伊豆守仲綱次男源太夫判官兼綱三男判官代頼兼水曾冠者義仲が兄小六條中家は等の一類郎等渡邊當を引具而三位入道の近衛河原の家は火を係て焼拂ひ三井寺へこそいそぎけれ渡邊當は箕田源氏綱が末葉鼻の龍口が子息は龍龍口といふ者有弓矢取ては双敵も無心も剛謀もいこかりなるが然も京洛第一の美男也宿所は平家の右大将宗盛の裏奪也源三位三井寺へ落給ふ

は傍輩此事を競い告んといふ頼政捨置べし後家平家の近隣也周章たる使よて

かくといふふらに妻子驚き從類泣悲んで逃かくれふとせば中々悪かりふん只打捨て音なせ競と洗く我をたのみまたをかりごともしかりこき者ふれを時をさきて來らんとしたまへば打捨告さりぬり去る程は源三位の高介の宮を尋て三井寺へと平家も披露あり右大将宗盛も心ならびて競も供して行けるかと見せらるゝは使歸りて競へ未と宿は居候と申すあら不思議や源三位の内小は競こぎ一二の剛者ふるは宿所居るならは呼來れといへば競と使と俱に参りたり宗盛卿出合給けるはいあまや玉の頼政は三井寺へと聞は汝の伴せさりたるかと問給へハ競は角とも告たまはねを争り存するべき右大将不審は思ひ源三位の内よハ一二の者と世は沙汰するよ小る夏は大は覺束ふりとのさまへは競夫は様こそをべらめ但し此間ハ怨申す子細候し付て心をかくる事とも侍りたとし頼政は告ごまはにじとも親もの多く候ふかくとも申さぬいよ主人の勘當の深々れはまがやうの大事小一人一人ふても大切ふまが候ふ競ふと打捨結小事はおぼろげの所存よハあら此上ハ追て参するふ及ハに慕ふも事によるなりと申々れハ宗盛の依て競を求めとく思ひける折柄なれば小のすけといふ名馬をたへて競を我者



小せんと手を尽されこと、ハ魇も其意を誦して我家に歸りいそぎ妻子を片田舎に  
かくし宗盛のあとへたる小がすげよまたがり宗盛の門前を通るとて手綱をい  
り鑑駒張立上り門の内をのぞきながら申がるハ魇を只今御前を罷通り待せ  
と昨日の御馬鑑を悦に存すれハ御宮仕も申べくなれども年來の主人入道殿ふい  
しく思ひ奉り候得ハ寺門はまき罷越候よと呼りて打過ぎ終小三井寺に馳附泰り  
ける上は糟毛の馬小宗盛といふ焼印を捺して歸りたりける

○高倉宮寺門入御源三位軍配

寺門大衆様々軍議あける小源三位入道申するハ今戦の習い勢の多少より謀  
を第一と申侍とも先南都又ハ山門に牒状を遣して大衆を召るべきかと宣ふま  
れて兩大衆へ牒状を御だりさまふハ南都真福寺の大衆會合議して忽同心な  
門の衆徒ハ返牒よ及ばざれども先同心の旨答へたりぬれハ平家も山門南都同  
心のより聞へかれハ六波羅の館ハ大勢集り終ハ山門の大衆へ近江米一石養濃  
緒三千匹を送り忽ち三井寺の發向を變阪すこれによつて三井寺の衆徒かくを詠  
りける

山法師織のへ衣薄して耻をハ元こそかくせりぬれ

山門の大衆ハ變改諸國の源氏ハ泰らに寺門をかりてハ叶ハるとして五日ハ園  
城寺を出てさせ給ふて南都を憑み落させ給ひける三井の金堂ハ御泰堂ありて蠅  
打といふ御笛をもつて萬秋樂のいさよを遊ハりて御回向ありけるこ我衣れふ  
れ

○宇治橋合戦淨明一來著名譽

高倉宮ハ御馬よ召て既ハ三井寺を出させぬひけり御淨衣よて御馬よめされ源三  
位の一類並ハ寺法師都合三百餘騎は伴ハ候トけり新羅明神の御前よて御心計ハ  
再拜しぬいて大關通を御出ふる東を願ハハ湖水渺茫トてさハ波悠々トり西を  
眺ハ嶺松蔭鬱トして涼風凜々トり關山關寺清水の名泉行もかへる會坂のころ  
も雲も走井やくる坂神無森醍醐路よかりて木幡里を打遇て宇治へ入らと  
ぬひける寺と宇治との其間纒ハ三里計也こハ小て六箇まで御落馬ありこれハ此  
程御目もあへず御震ふらざる故とかやこれらも御運の末とぞしられける平等院  
よ入らせぬふて暫御般ありける其間ハ宇治橋の間三間ばかり斷切て衆徒も  
武士も宮をぞ守護し奉る平家ハ南都へ入らせぬふよ聞て追討使を差遣さる大  
將軍ハ左兵衛督知盛卿藏人頭重徳朝臣中宮亮通盛朝臣薩摩守忠度朝臣左馬頭



行盛朝臣淡路守清房朝臣侍士小八上總忠清上總大夫判官忠綱撰津判官盛澄高橋  
 判官長綱河内判官季國飛彈守景家都合二萬餘騎鬼道路より南都をさして追りく  
 る平等院に敵ありと見へければ平家の兵共雲霞の如く一馳聚て河の東岸小ひか  
 えて鬨を作る事三度山も河の震動すれは宮の軍兵も鬨を合せて橋爪に打立て防  
 矢多く射たりけり其中に寺法師は大夫の秀定渡邊清とて究竟の手足也けるが矢  
 面に進て差詰り射けるよを楯も鎧も川にずして多の者の討れける平家の先陣  
 も始に橋を隔て射合けるが後橋上小上つて散々射る其中に信濃國の住人吉  
 田馬允笠原平五常盤江三郎を始として二百餘騎進出て戦けるは常盤江の内甲を  
 射させて引退く宮の兵は橋の爪よて差詰り射けるは面を向者矢疵を負ぬ者そ  
 ふき東の軍兵は東の爪よ響を並べて雲霞の如く橋を狭く人々多し我劣といや  
 ぐ上よこみ合たり未だ曉の事ふるは川邊立て暗ハ暗ハ橋も引されは先陣に進む  
 首橋を引とるぞと口々小呼はりけれども耳も入れず我先よと馳こみける程よ  
 先陣の二百餘騎を川中へこそ打落す早夜もほの——と明ぬれを寺法師魏々と  
 して申よも筒井澤明妙林といふ者あり自門他門は免されざる惡僧也黒塗の箆よ  
 塗篋は黒の羽を以てはいざる箭は四差ざるを頭高し負ふ一つ一つ七もぢりふるま

ゆみの一め塗ぬりたるは真中をとり鳥黒の馬の七寸よはづみたる黒鞍置て熊  
 皮の泥障さしてぞ騎とりける同宿世人同毛色よて真黒よぞ出立ける三尺五寸の  
 長刀を重し持せて具足せり淨明云けるは殿原暫軍を止るへ其故の敵の楯よ我矢  
 を射立て我楯よ敵の矢をのみ射立られて勝負あるべきとも見へず橋上の軍は淨  
 明が命を捨ててぞ事行ふべき續とんと思ふ人々連けやといふ儘は馬より飛下りて  
 板橋とる橋桁の上小上りてやけるは物その者よあらざれば音小もよも聞給ハト  
 園城寺小隠ふき箇井の淨明とて一騎當千の兵ふり手並見給へとてさんく小  
 射けれは忽敵十二騎射ころ十二人小手を負せて一ツハ残りて敵ある箭種盡  
 めれハ弓をばかーこよ投棄服もといて打すて童よ持せざる長刀取左の脇よかい  
 狭て射向之袖をもちり合せ鏝を傾け橋桁の上を走り渡る橋桁の纜よ七八寸の廣也  
 川深くして底見されは普通の者の渡るべきよあらざれども走りける分野は淨明  
 が心よは三條五條の大路とこそ振舞けれは世人の堂衆等も續ざりしが其中よ十七  
 よふる一來法師計こそ少しも劣らば連けれ淨明本來好む所へければ今日を限り  
 と四方四角振舞て飛廻りけれは面を向ふる者ふかりけり長刀ひらめかー電光の  
 如く見へけれは立所よ敵九騎討取て十人とやけるは甲の鉢よこい打當て長

宇治橋より  
浄海一木を  
北有の世図



刀こらへずして折かれ河へかりりと投入て太刀を抜てぞ戦ひける又太刀小て  
七騎討取て六騎一子負て休居り平家方より悪き法師の振舞ふ只一人多  
くの者討れさるこそ安からねとて鐵を傾て長柄を出す兵有り浄明これを見て面  
目一東門五色の熟瓜をやとて甲の鉢を打破て喉笛打さかんとて打りけるよ  
太刀も根へずして折れ六の根より折れ太刀の折れ甲の頭も打破れて河中へ  
落しける悲所ハ小計也これを抜持て飛でより死狂とぞ見へよける味方これを  
見て浄明討すふ者共とて後中院但馬金剛院六天狗鬼上佐渡備中備後能登加賀  
小藏尊月尊養慈行樂任金奉玄永等命を惜す戦ひけり橋桁ハ挟し側より通る事も  
ふらず浄明は双ひ居る一來法師今ハ暫く休候へ浄明房一來進んで合戦せんと  
云けれハ尤然るべしとて行桁の小平ふる所を無禮にゆとて一來法師鬼ハねし浄  
明の頭頂ハ手をつくとぞ見へいかりりと越さりける敵も味方もこれを見ては  
れ越さりあつはりハねさり越さりと褒ぬ者こそふかりけり此一來法師ハ普通の  
人よりも長ひきく膽神も太き萬人ハ勝れさりされハこそ甲冑をよろひ兵杖弓矢  
と帶ふから身の軽き事蝶鳥の如くあれ程袂き行桁を走わさり大の法師をばね  
越さりける太刀の陰天よもあり地よもあり電のひらめく如く切落し切伏らるし

者其數を知らず上下方人目を清りてぞ見とれ居る浄明一來討る者八十三人  
也一騎當千の兵とハこれらをやいふべあこら者共討すふ荒手の軍兵入かへよや  
一と源三位頼政下知しけれハ渡邊黨一省至覺授與競列配早清進ぶんとぞ始と  
して各一文字群々名乗て三十餘騎馬より飛下りし橋桁渡りて戦ひけり浄明は  
これらを後陣小從て彌力付て忠清が三百餘騎小向て死生しとぞ合戦す三百餘  
騎と見へいごと浄明一來り手よかりり又渡邊黨小討ふされ百騎ハかりり成て  
そ引退く平家の大将これを見て橋の手こそりちみて見ゆれ返合せよと下知すれ  
バ我もしと橋の上小ぞ走重ける橋ハ二間餘引さりけれハ後より味方ハ推れ  
心ふらず七十餘騎河中へ流落て浮つ沈みづ溺けるこそ無愧ふれ源三位これを見  
て世を宇治川の橋下へ落入ぬれハ堪がさし況真途三途川こそ思ひやられて  
おもひやれくらき暗路の三瀬川瀬々の白浪拂ひあへしを 頼政  
箇井淨明心ハさけし思へとも手負ぬれば引退く平等院の門外芝の上よて物具  
脱て甲冑見れハ立處の矢六十三筋大事の手五ヶ所也閉所よ立寄こしこの一と灸  
治し頭ハからげて弓打折杖小つき足駄履て獨言して云けるハ法師等が外ハ軍心  
よ入さる者ハ見へずいかよも始終墓々からトとて阿彌陀佛とやて奈良の方へ

ぞ落行ける圓満院大輔慶秀矢切但馬明禪といふ者これ又武勇の道人は越さる兵也やすしと行柁を渡りけるを平家の軍兵矢袋を作て射ければ射すくめられてわさりえざりける長刀を振上水車の如く廻しければ雨の降やうし射れれども長刀小薙れて箭の四方よぞ散しけるこれを見る敵味方飛花落葉し似たりと譽ぬ者こそふりりけれ申も後中院の但馬房矢切と申けるは左の脇小長刀を挾右の手より三尺二寸の板持て敵の射る矢を切落す下る矢をハ踊り越上の天をハいり向ふ矢をハ伐落す飛鳥の如くありらへハ身立矢こそふかりけり其間敵入討取て引退く扱ふそ矢切但馬ともやけれ橋を引ければ敵數下騎ありといへども渡り得ず寺法師小防がれ合戦時をぞ移しける平等院の前西岸の橋爪は打立こる宮方の軍兵われしと扇を上て渡せやと招割りけるこれ程の臆病ふる軍將やある太政入道こそかゝる不覺の者共を合戦小差遣す條一門の恥辱小非ずやとて舞ふつる者もあり踊はぬる者も有されども一騎も進む兵ふかりけれ寺法師法輪院荒土佐鏡鑲をハ雷鳴房とぞ申ける雷鳴房一里を轟習ひ此土佐も三十六町の外にある者を呼驚す大音聲ふれば定の小りよも聞へトとて岸の上の松小登て一期の大音聲今日を限とぞ呼はりける生ある者ハ皆命を惜むふらひふれ

ども奉公忠勤を致す輩更ふ以て身命を惜事あるべからず況戰場は敵を目懸るがら輿を押して馬小鞭打ざる條大臆病の平家の軍將心劣りせり源家の一門ふらよ一む此河わさすべし高名々譽を天に耀す也平家の公達これを聞さまへあく源三位入道殿矢袋を採て待給ふぞ源平兩家の中は撰れて夜鳥を射たり大將軍や臆する所尤道理也茲一來法師太刀を振ハ二萬騎其先驚されて屋籠ふり見管し思ひ切て渡せよやとぞ喚りける左兵衛守知盛これを聞て安からぬ事哉やうは笑れぬるこそ後代の恥辱ふれ柁を渡せばこそ多くの兵射落さる大勢を川に打入て渡せとぞ宜ひける平家方よ伊勢國任人右市の白兒黨とてさくめきて押寄さる宮の御方より渡邊黨名乗合とて散々射る白兒黨先陣は進戦ひける内は三人共赤威の鎧は赤符つけたる武者馬を射させて河中へはね入られて浮ぬ沈んつ流て宇治の綱代よる秋の紅葉の籠田川波間ようかむ異ふらず其中一弓箭を綱代よりつけて有有よ命助かるを源氏見て

伊勢武者ハみふ緋威の鎧きて宇治の綱代よかりけるかふこれハ昔より氷魚の貢あれハこれよととて詠ハ平家の待士上総守忠清此有様を見て橋の引さり水ハ高し人種ハつくるとも渡すべしとも覺す追手の勢少

々をこゝろに置いて敵をありらひ搦手の淀河内路へ廻て敵の前を塞て戦んとぞ議  
さりける

○忠綱宇治川先陣頼政最期

爰に下野住人足利又太郎忠綱進出て橋を引れ河を隔これをとて敵を見捨て時刻  
を移すふらへ吉野奈良法師乗りてゆき大事ふり忠綱第一番小先陣ふりなる  
おそめさまりかりなるこれをばしめとして三百餘河を渡りこれの宮の軍勢暫く  
平等院小引退く足利又太郎の西岸小打上り鎧踏むつ杖つき物具の水走り紅  
の扇を仕ひ今宇治川の先陣せる下野國依藤太秀卿五代の苗裔足利太郎俊綱が子  
小太郎忠綱生年十七歳小事へえらば大事の軍の三度までいまだ不覺をとらば名  
を得さらんもの忠綱を捕やとかりりなるとぞ其時源三位頼政の薄黒漆の長緒  
直垂小岳川織の鎧着て今日を限りとや思ひなん態と魁へ着に敵數百騎とをげ  
き戦ありて終小扇立小戦死ありなる其辭世小  
埋木の花咲事もふがり小身のふる果ぞあられふりける

○高倉宮的流筋薨去

宮ハ平等院を落させ給ひつゝ男山八幡宮を伏拜みはりて新野池も過ぎさせ給

ふて井手のわさりとといふ所まで延させ給ひたり御殿もふらけ喉も乾せはり  
なれハ小川の流を渡りて進せたり此所をはいづこといふぞ此川の何とお尋あ  
れハ此邊をハ山城の井手のことりと申し河をハ水ふり川と答へなれハ思召はじ  
けるはいある

山城乃井手のわさりと時雨して水ふり河小波や立つん

御誠有て光明山へかしたるまふ軍兵後より追かけ進トせたるら何者射る  
りたる矢ふらん鳥居の前小て流矢來りて宮の御片腹に立たりなれば即御馬より  
直進小落させ給いてとりふし失させぬまいなるとぞ

○太政入道籠祇王低女佛前

治承四年六月三日小福原へ遷都あるべきより披露あり小俄小又。田小引上  
れて行幸ありたる小其頃美艶の白柏子二人有り姉をハ低王妹を低女といふ天下  
無双の舞姫と披露しなれハ入道これを召以小紅顔舞小して白粉姫を粧ひたり見  
れども飽事ななれハ姉の祇王を殿中小召て最愛し給へハ妹の祇女も姉の光り小  
より威を耀せり然る小まご天下無双の能指出て來れり名を佛御前といふある時  
太政入道の亭へ推参して舞かふでざるよいつりや入道佛の愛小おぼれ祇王の事

を忘れさどごまいければ

前出るもめるもあま野邊の叫いつきり秋ふあて有べき  
と一首の和歌を詠て祇王祇女の嵯峨野小分入り尼とふりけるを佛御前も俱に感  
して同く嵯峨野に尼とふりつゝ三人りひとく沙門入りと

○文覺授平家追討院宣頼朝

治承四年九月二日相模國住人大場三郎景親東國より早馬を攝津福原の新都へ馳  
登せて中越す條の伊豆國の流人前右兵衛權佐源頼朝一院の院宣高倉宮の令旨あ  
りと稱して關八州源氏の軍兵を從へ上洛し及ぶと告りらせける太政入道これを  
聞安ららず思われれて宜いける東國の奴原といふ六條判官為義が一門全頼朝  
は從ふといふもみふりれか家人也其は頼朝を東國へ流罪しける早八箇國の家  
人頼朝を守護して入道が一門を亡す企也論の盗人は鍵を預け千里の野は虎を放  
ちさるが如し入道座もさまらず躍上りしえぬひけれども後悔今叶はず  
かのみふらに高雄文覺房伊豆國へ流人と成て密に頼朝小謀叛を勧ける此文覺上  
人と申の俗姓遠武者盛遠といふ十七歳の時源渡の妻の袈裟御前横懸慕して若  
われは從されれば母を害せんといふ袈裟御前とん方ふく我大を害しむへとて日を

約し自犬の姿と成て盛遠に害せらるそれより遠藤武者發心して出家と成種々苦  
練荒行を修し高雄神護寺に住て再興の勸進一院所法住持殿にまいりて御奉加  
のよ一言上す御遊の切節ふれは奉者申入れず文覺終日相待けれどいおよとい  
ふ事もふかりければ天性不常の物狂にけぬ是非の案内もふく佛所の庭へ進參  
りて珍しうらぬ管絃の機嫌もふき佛遊かふわれ貧道無縁の身なりといへども  
高雄山神護寺の修造建立として佛道に任し王法を祈禱し衆生を利益せんといふ  
大願あり其大願の意趣御聽聞あるべきとて勸進帳をさつとひろげ調子もしらす  
大音聲は瀧上よりふを狼籍して荒廻りければ檢非違使榜とりて禁獄に入其後伊  
豆國へ流罪の仰ありけり文覺豆州へ越きある時蛭子島に至り頼朝に見奉り云け  
るハ國こそ多きま當國へ流されけるは佐殿の御父の骸を見奉り入奉らせんと  
てはらりと泣けり兵衛佐殿これを見ぬいて一定とハいらされども父の頭と聞  
よりふつかしく思いつゝふくこれに請取て袋の中より取出して見ぬへハ白  
曝さる頭也膝の上をかきすへて良久く泣ぬふ我父ハ子息數多をハいませし中  
に兵衛佐を鬼武者とて十歳斗りまでも膝の上小居て愛し給ひし志の報や今ハ  
骸を請取て又膝の上小置奉る事哀よぞ思ひける文覺佐殿に申けるハわれ神護寺



貞婦如衣  
油衣掛  
盛遠子  
成る(因)

再興の志願ありて院御所小勸進一奉り一辛目を見るのみ一非流刑の旨を蒙る時心中發願の旨形をすする事ハわれらふらず神護寺を造營成就すべき願望を遂んふらば配所へ下り着せて断食せんふ死すべからず其事叶ひがさきふらば途申上駈をさきらふべしと誓ひたりしが佛神の加護にて成就すべき印一や三十一日にて此地一着り一疾平家を亡して後御父の菩提の爲且ハ文覺の本意の如く大願の果一ぬへといへば答へて頼朝ハ勅助を免されずして何事も其恐れありと宜ふ文覺誠一思召立ぬへハ我京一上り院宣をよべしと云ければ佐殿ハ御免の院宣を賜り平家追討の勅命を蒙らハ平思ひ立ざるべし但一片近も勅助の身ハ向いりじと宜へハ文覺忍んで上洛すべきとて國中七箇日入定と披露一方丈の側ふる庵室をかこく銷一地の底を掘て坂道をいとふみりの穴より這ひ出て夜一紛れ上洛す新都福原の樓御所小乘りて院の近習一前兵衛督光能といふ人ハ文覺一ハ外戚一ついでゆのり也其人小行向ふてけるハ伊豆國の流人兵衛佐頼朝こそ朝家の御歎きを證一萬民の煩を避んと年頃の願ひ早院宣を下し給はるふらハ東八箇國の家人を催し都一上り平家を亡し仙洞の打籠れまします逆鱗をも休奉り國家をも鎮侍んとや此言一付て事の様を窺ひ見る一餘所目一ハ勅助の者として

憚る様ふれども内一ハみふ從一通り況や院宣ふと下されふハ大名小名誰り壹人も背やべきいつとふく御心苦き御目を御覽せんより院宣下されよと奏しなへと語る光能宜ひけるハ君も打籠られまし一て世の御事一ろ一めされすされずさこそ御心憂思召らめ頼朝さやう一申らん事帝運の再び堯舜の代一改らし事こそ嬉しけれとて密一御氣色伺いけり然るべき御事一やとて御免有けれハ即ち光能奉つて院宣を書て給しけり文覺これを給ひて上下八箇日一伊豆一着けふハ出定の日也とて又國中ハ男女雲霞の如く集て扱んとす弟子の僧銷をはづして戸を開さり威儀乱さず定印違ふ髮生のいて瘦黒みざり弟子銅の鈴をもつて入定の前一ツこれを鳴す文覺鈴一驚きて出定せり見る人々いよ一佛の如く一貴けりうくて兵衛佐殿の許一行てけるハ院宣ハよく一やさハ賜氣也今ハ安堵一給へ勢を語いゆさるべきといふ佐殿ハことハ院宣を手一抱さりとものる身一して左右ふく人ハ同心すまど況いよ一給さる先一叶ふべりらすよ一ふさ上人のいい事一ついで此事あらハれふハ再びうき目をやみんと宜へハ文覺ハ申固めて下りこり膳をつぶし給いぞ法皇の仰一頼朝さやう一このも一く申すふれハ子細一や及ハすと仰出されさり院宣を急給らんと思ひぬハ一高雄一庄園



を寄進あるべいと云ければ佐殿の我身さへ安堵せずしていうよと奉るべし  
と宣ふ只文覺が計いし隨ふて早寄給へと云佐殿の我軍一勝て日本國を手にとら  
ハ一國二國をもしよるべしと宣ふ文覺若手入つれば必ず惜き物也ふき者の  
惜うらぎ國も廣博也唯所知を十餘所寄進し給へと紙硯とりて丹波國の新庄  
本庄雀部宇都細野播磨國の五箇庄上佐國は高賀茂郷を始として十三箇所を  
撰出しそれといひければ佐殿鼻うそやきて思はれけれども寄進状を書判形  
まくとへて文覺し給ふ文覺ハホ、笑て了、御邊の以の外の心廣き人なり我物顔  
よしみとく寄給へり其荒涼よて一定天下の主とありふふさらの院宣奉ら  
んとて懐より文袋取出し申ふる院宣を進る佐殿の手水嗽して淨衣し紐さしあど  
してこれを披見し給ひけり

早可追討清盛法師拜一類事

右君子不道人者令民成愁茲臣在王朝者賢者不進彼一類者當非忽緒朝家失神  
威與佛法既為神佛之怨敵亦為王法之朝敵仍仰前右兵衛權佐源賴朝朝臣宣令  
追討彼輩早退怨敵可奉安宸禁矣依院宣執達如件

治承四年七月五日

散位光能奉

謹上 前右兵衛權佐殿

○石橋山合戦

治承四年八月十六日兵衛佐頼朝郷北條時政を招て伊豆國の目代和泉判官兼隆ハ  
平家の傍親和泉守信兼が嫡男ふり八枚の笛小あれハ八枚判官といふまづ兼隆を  
夜討しすべしとて時政を大將として嫡子宗時小先驅させ弟の小四郎義時佐々木  
太郎兄弟四人をばしめとして家の子郎等剛勇の兵八十五騎小八枚が笛小向ひ  
終つ八枚判官兼隆が首をとりける時政兼隆が首を見せ法華經の席品をさよも知  
らぬ身が八枚が末を見るぞ嬉しき

○佐奈田侯野組討

同八月廿二日近國の平家を亡さんとて兵衛佐北條佐々木を先鋒として伊豆相模  
二州の軍勢三百餘騎引具し石橋山小陳をとる平軍大場三郎景親ハ武藏相模の勢  
をばねきて自大將として三千餘騎小石橋城小押前谷を前小隔て海を後小して  
陣を取其日もや西山小傾く頃よりえげき戦小双方討死ふにもの多くありつ  
る申ふも平軍の大場侯野ハ名ある勇者小向ふものふければ佐殿佐奈田義貞小  
宣ひて大場侯野の兩人小組やと嚴命ありければ佐奈田一命を捨て侯野し組附久



石指山  
佐奈田侯  
豊組  
る園



いといとみて討死ふしこりこき小より源平互ひ小入替し終夜戦ひけるが軍兵ももや疲ぬ敵は大勢ふり今はいかしも叶ひなきとて曉方小佐殿の勢は土肥をさこいでぞ落行ける

頼朝卿隠臥木助梶原佐殿

兵衛佐殿は土肥杉山を極分し落行玉ふ伴よ土肥次郎實平北條四郎時政隠崎四郎義貞土肥彌太郎道平懷嶋平權守景能藤九郎盛長以下の輩相従ふて落ぬひけるを大場曾我案内者として三千餘騎追かけこり杉山の内狭き所よて忍ひ隠るべき様ふし田代冠者信綱の大將軍を落延さんとして高き木のうへ引取く散々射る三千餘騎田代小防がれて左右ふく山ふも入さりけり其隙し佐殿の意の岩屋といふ谷より下り傍りを見廻しなへ七八人づ程入ぬべき大ふる臥木あり暫こし休て息を續玉いけり去程小御方の者ども多く跡し付て集るこしし左々木仰ける敵の大勢也えりも大場曾我家案内者よて山路して相尋ぬべきされ大勢の悪かりふん散々忍い玉へ世しあり互小尋ね尋ぬべしと宜へば諸將答てわれら既し日本國を敵し受こり遁るべき身小非すと小うく一所しこそと各返事やけれは兵衛佐重て軍の習或ハ敵を落し或ハ敵を落さるし是定れる事也一度軍

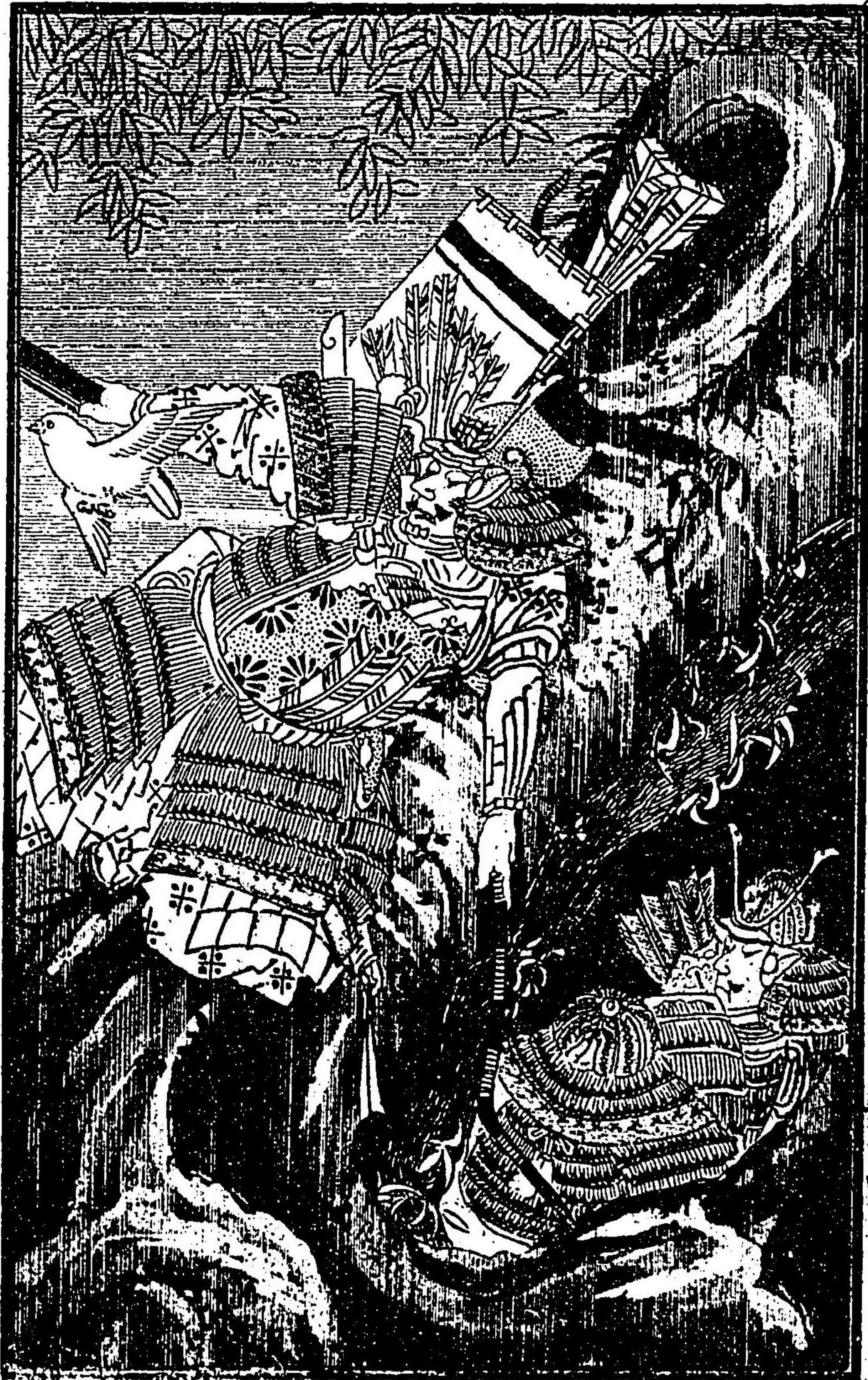
と敵小敗られ永命を亡ぶ道やあるべきこし小集て敵あふつられて命を亡はん事愚なる小非や昔范蠡會稽の恥を悔す畢し句踐の讎を復す曹味三敗の辱し死せず已し魯國の羞を報ずこしをのがれ出て大事を成立さらくこそ兵法よハ叶ふべけれ各心よまかせて落へし頼朝山を出て安房上総へ越ぬと聞ハ其時急尋來り玉ふへしと言ふ盡して宜へ各思ひしよ落行ける北條時政ハ甲斐の國へぞ越しける佐殿相従ふて山し籠ける者ハ土肥次郎實平同男遠平新開次郎忠氏土屋三郎宗遠同崎四郎義貞藤九郎盛長也兵衛佐殿ハ軍兵より成て臥木の天河し隠入玉ふ其日の裳束しハ赤地錦の直垂し緋威鎧着て臥木の端近く居玉へり裾金物しハ銀の蝶先を殿し打こりけれハ侍よりしやきてそ見へしける其中し藤九郎盛長申けるハ御先祖伊豫守殿奥州の自任宗任を攻ちるし時官兵多く討れて落玉いける小籠し七騎よて山籠し玉いけり遂し逆賊を亡して四海を籠玉いけり今日の御分野昔し變る事ふし吉例也と申けるハ佐殿もいとこのしよてをかくして八幡宮をぞ心中し念し玉いけり田代冠者の矢種ハ既し盡ぬ佐殿今ハ遙し落延玉いぬらんと思ひけれハ水より飛下りて跡し目を付て落玉い同臥木の天河しぞ入しける大場曾我家野梶原三千騎山路して木のもと菅の中し亂れ散て尋けれ

ども見さりけり大場臥木のうへに登り弓杖をつき踏跨て正しく佐殿のこゝまで  
おはしつるものを此臥木こそ不審なれ空虚に入て捜せもの共と下知りける大  
場が従弟一梶原平三景時進出て弓を小脇小太刀一手をかけて伏木の中一つと入  
り佐殿と景時と互小眼を見合せり佐殿の今の限りと思ひ景時が手小懸めとお  
ぼしけれの急自害をやせん又の降をや乞とをほしけるが景時程の者一降をば乞  
べき自害と思ひ定て腰刀一手をかけ玉ふ景時哀一見奉て暫く御待けへ助奉るべ  
し軍一勝玉の公思召忘れ玉ふ若又人の手一懸玉ふらは草の陰までも景時  
が子孫を守玉へとやも果ぬ蜘蛛の糸さつと引たりける景時不思議と思ひけれ  
はらの蜘蛛の巣を弓の箭甲の鉄小ぢかけて伏木の口へ出しけり佐殿堂を合せ景時  
の後影を拜して世一ありバ此恩を忘れしこと亡ひたりとも七代主ての守らん  
とぞ心中誓れける平三伏木の口一立塞て弓杖ついてやけるを此中一蟻一疋  
ふ一蟬蟠の多く騒飛出たり土肥の直鶴の方を見やれハ七八騎落武者見へたりこ  
とこそ一定佐殿とをがもあせを追ふべしとぞ下知りける大場見やめてのれは佐  
殿してハおハせすいぢし此伏木の中いぶが斧鉾にて打碎き見るへ一それれも  
時刺移るふりより一景親入て捜し見んとて伏木の中へ入らんとえけるを平三

立塞て太刀一手をかけて云けるハやをれ大場殿當時平家の御代也源氏軍一負く  
落ぬ誰人が源氏の大將軍の頸取て平家の見参し入て世一あらんと思はん者ある  
へさう御盪小劣て此臥木を捜すべきか景時一不審をふして捜んと宣ハ我こそ  
二心ありと疑れんも無念ふるべし甲の鉄弓の筈蜘蛛の糸かゝるべしやこれ  
を猶も不審と思ひ玉の生ても面目ふし誰人よても捜さすまト此うへも推て  
捜す人あらば思ひ死て指違へ死さんと景時あらいか云放せば大場も流石は入  
さりけるが猶も心にりりて弓を差入てからりしと二三度打振さぐり廻しけ  
れは佐殿の鎧の袖一ぞ當りける深く八幡宮を祈念し玉ひける験一や臥木の中一  
り山鳩二羽飛出てはこしと羽打して出たりけるこそ佐殿の内一おハせん小  
ハ鳩棲まトとハ思しけれども尚も不審ふりければ斧鉾を取寄て碎見んと云ける  
所さしも晴る大空俄に黒雲引覆ひ雷影敷鳴廻て大雨傾は降暴風きびしく吹て  
諸木を倒し霹靂して電劍の如く光り雷所々落て巖石を碎き微塵はなせ諸軍  
勢騒ぎ立ちたるたへはいる所大雷一ツ落て七八人しても動しからざ巖石を碎臥木  
は立塞てぞ見へけを雨止て後岩を碎き見るべしとて大場の杉山の方へ引返し  
けるもろしも聖徳太子佛法を興さんとて守屋と戦ひ太子無難なりけを只一人



景時  
石山  
頼子  
救  
の  
図



逃去り玉いて原木の虚に隠れて命を全ふし守屋の大連を平らげ玉ふ又天武天皇も大友皇子に襲れ不破關にて既敵追のけられ奉り危く見へぬいける上傍ふる大木の稷二ツよわれて天武帝をかくし後王子を亡して天武位に即玉ふこれらも然るべき瑞相よてあしる伏木の虚にわくわくふしやと末このもく佐殿ハ三千餘騎が引退さざる其隙小内より石を轉し臥木を出て小道越といふ岩石を登り土肥の眞鶴へ落ぬふ雨もやみければ大塲馬を引のへいこのも臥木いぶの虚の中をへりけりこれハ梶原景時が計して落しけりされども遠のよも延々ハ續て攻よと軍勢がつれ追かけたり

大塲馳早馬大政入道申官符

同九月朔日大塲三郎景親使者と六波羅へ立入り平家の一門馳集て注進の状を披小云伊豆國流人兵衛佐頼朝院旨あつてと稱し忽謀叛を發し去る八月十七日夜俄小三十餘騎の勢をもつて入攻め館し押寄和泉判官兼隆を誅戮し館を放火焼亡し終ぬ同廿五日城郡を當國石橋山小構へ三百餘騎の凶賊を卒し彼城に檣籠るの間景親三千餘騎の軍兵を相催し同廿三日夜よ入るまで攻めふ所し頼朝堪は廿四日

曉天かの城を落退る行方知れず或説は穴を堀埋られたりとも又或説は石を懐て水よ入とも巷説端なり梶其首を見ずといふとも滅亡の条勿論なりとぞ申送りける太政入道より始て一門の人々大ひに悦びて景親は勸賞の沙汰ありけり九月四日戌刻太政入道御所を参りて此旨を奏し追討の宣言を下さるべきよし新院は奏しぬされよつて即平維盛薩摩守忠復参河守知盛は官符を捧下されたまふ

頼朝郷催軍勢降参大塲景親

兵衛佐頼朝郷ハ合戦は勝利を得て勢大なり平家の軍兵東國へ下向のより聞たまひて武藏と下総の境なる隅田川に陳をとりつづいて足柄山を後ら當富士川を前受て陳をとるふれよよりて東八ヶ國の大小名別當庄司檢校允介なれといふやどもなく二十騎三十騎五十騎百騎白旗を靡してこゝかこより参集る事雲の出が如くなりければ畠山庄司重忠半澤六郎なんどいづれも参り合するもの多し終る大塲景親も降参して命を全ふせんと源氏を下りたれば足柄山を打越伊豆の國府は着て三嶋明神を伏拜木瀬川宿は揃ひたる勢ハ二十萬六千餘騎とぞ註しける

平軍奇富士川西岸真盛敵美語

平家ハ東路日數を経つ路次の兵を具して五萬餘騎まで駿河國清見關沖津國崎



富士川に平軍敗走るる面

湯井蒲原富士川の西の端まで青奇たり東の河原は源氏の白旗を捧げ東國廣げ  
れハ源氏の勢ひ弥増は附て勢物恐しく見も權亮少將維盛ハ齊藤別當を召て抑頼  
朝が勢の中は已程の弓勢の者幾等程かある東國居住の者なれば案内ハよく知り  
たるらんと問たまへば眞盛こゝは於て敵の美をかたりはかゞ味方勇氣なかり  
しめたりければ平家の軍兵これを聞て臆病神は着さけると答

○平家驚水鳥羽音逃登京都

平家の大將軍平維盛ハ宗徒と憑む實盛の物語は心弱り益々味方の勇氣弱くなり  
しといへども軍兵とも力を添へんと宿々より傾城旋女を集めて酒宴なせし  
源氏ハ明廿四日矢合あるべしとて軍議ありて終夜箭火をぞ焼たりける水流はか  
ゝやまて澤辺の螢かと疑る平家の方にも箭火焼て夜も漸く深ければ各々寢入て  
ありけるは夜半をかりみ富士の沼に群集り居たる水鳥いくともなくありける  
が源氏の兵ども物見ゆくめく音馬の嘶く聲なほ驚き飛立ける羽音の夥しが  
りけるに眠りを覺し源氏近附て関を造るぞと心得て是ハや敵の奇たるハといふ  
程こそあれ平家ハ人將軍を始として取物もとりあへず我れ先よとて落たりける  
これより京家の討兵ハ矢一ツだも射ずして逃登りたる可笑さまとて大政入

道の門へ富士川の瀬々の岩は水よりもやくも落る伊勢平氏かなと落書なせ  
りよりまで大政入道安かゞ思ひければ維盛を鬼兎嶋へ流し大將忠清の首を刎  
よと嘆りたまひさ

○義經來頼朝陳前誅大場已下

平家ハ斯逃登りければ源氏ハ尚浮島が原に陳を取つておハしけるこゝは年二  
十餘り色白く勢小男の顔寛未として威あつて猛く胸は鎧を脱し八陣の軍法を  
斯へ張子房を左より諸葛亮を右よりたる人品即等參甘騎相具して陳前は出來て  
名乗けるハ是ハ故左馬頭殿の子息九郎督子常盤腹は牛若丸と申侍りしが後ハ  
遮那王とて京都北山鞍馬寺にありしが世の中住説て奥州は落下りて男はな  
り九郎冠者義經と申者よて侍るが佐殿一院の御説を蒙りたまひて平家追討の披  
露あるよよつて一門の我執を存し御力を添奉らんとめは夜を日と緯て馳参上を  
申させ宣ひければ佐殿聞もあへば涙を流し早請し入れたまひて俱に平  
家追討の軍議并々賞罰の沙汰何くれとなく最隔なく談したまひければ爰は於て  
大場三郎景親をよとめ源氏は仇せし虜數名の所刑を行ひ身方は忠ある諸士の銘  
々へ夫々勅賞行ハれけると答





◎木曾義仲揚義兵

こゝに信濃國安曇郡木曾といふ山里に木曾冠者義仲といふ人あり故六條判官爲義が孫帶刀先生義賢の次男也義仲こゝに住居ける事ハ父義賢ハ武藏の國多胡郡秋父次郎重登が養子なり義賢武藏國比企郡へ通りけるを去る久壽二年二月は左馬頭義朝が嫡男惡源太義平相模國大倉の口まで討てける義賢ハ義平ハ叔父なれハ木曾と惡源太とハ従父兄弟也父が討れける時ハ木曾ハ二歳名をバ駒王丸といふ惡源太ハ義賢を討て上洛けるが畠山庄司重能といひ置けるハ駒王をも津出して必ず害すべし生残りてハ後悪るべしと重能槌み承まはりぬといひたりかごもいかゞして二歳の子ふ刀をバめてべき不便と思ひて折節齊藤別當實盛が武藏へ下りけるを悦びて駒王丸を母にだかせて養ひぬといひやりけられハ實盛請取て七箇日置て素下けるハ東國ハみな源氏の家人こなま下ひは養ひ置て討たらんも中妻なく討せとせんと身の煩たるべしとて木曾の山深き所ハ中三權頭といふ者ありこれハ隠し養ひて人と成なハ主とも憑かりとて母ハ懐かせておくり遣す齊藤別當情あり母の懐に抱て泣々信濃へ逃越て木曾中三權頭は見て我ハ女の身かひくく養ひ立ひと覺す深く和殿を憑なり養ひ立て子

ももし百一も世ふある事もあらひあこち草ももし玉へ惡くハ従者にも仕へ候へといひけきハ兼遠哀きと思ひけるうへ此人ハ正しく八幡殿にハ四代の御孫也世の中ハ淵ハ瀬とある喻あり今こそ孤子にておかしますとも武運開らバ日本國の武家の主とも成やし玉ハんいかさまも養ひ立て北陸道の大將軍まぢし奉つて世よあらんと思ふ心有けきハ憑しく受取て木曾の山下といふ所ハ隠し置て廿余年が間育み養ひけり然るべき苗胤にや弓矢取て人ハ勝心剛ハ馬ハ乗て勇あり風ハ平治の合戦ハ源氏悉く亡びぬと聞へしりバ木曾七ハ歳の稚心ハ安からず思ひて哀平家を討殺して世を取バやと思ふ心あり馬を馳弓を射るもこむハ平家を責へき手習ひとぞ宣ひける長大の後兼遠ハ云けるハ我ハ孤也けるを和殿の育まよつて成長せりあゝる使なき身ハ思ひ立べき事ならねども八幡殿の後胤として一門の宿敵を徐々見るべきに非ず平家を亡して世ハ立バやと存ずいかハ有べきやと問給ふ兼遠悦びて殿を今まで育み奉る本意ハ偏ハ其事ハあり憚り給ふかと勇みて云けれハ其後ハ木曾種々の謀計をめぐらして京都へも度々忍び上りて窺けり片山陰ハ隠れ居て人よもはりくしく見しられざりけきハ常ハ六波羅ハイみ窺ひけせとも平家の運盡ざりける程ハ本意を遂ざりけるハ高倉宮の令旨を



國成經  
 彈正  
 長  
 子



かりけるより今ハ憚るゝ及バす色ハ顯きて謀叛を發し國中の兵を駈從へて既  
 一千餘騎及べりと聞由木曾といふ所ハ究竟の城廓也長山遙々連て禽獸布し  
 て嶮岨屈曲也溪谷ハ大河漲下て人跡又幽かり谷深く梯危くしてハ足を峙て歩  
 峯高々巖礪してハ眼を載て行尾を越尾ハ向て心を摧谷を出て谷ハ入て思ハ  
 す東ハ信濃上野武藏相摸ハ通て奥廣く南ハ美濃國ハ境道一にして口挾し行程  
 日の深山也縱數千萬騎をもつても攻落すべき様もなし况賤梯引落して楯籠ら  
 馬も人も通ふべき所ハあらむ義伸こゝハ居住して謀叛を起し責上て平家を亡す  
 べしと聞へけきハ木曾ハ信濃よとりても南の端都も近けきハこはいあゝせんと  
 上下騒あへり

源氏追討使彈經正竹生鳥琵琶

壽永二年四月十七日木曾追討の爲ハ官兵北國ハ發向をせより東國ハ攻入て頼朝  
 を誅すべしと聞由大將軍ハ三位中將維盛越前三位通盛薩摩守忠度左馬頭行盛  
 參河守知度但馬守經正淡路守清房讚岐守維時刑部大輔度盛侍大將ハ越中司  
 成俊ハ有官の輩三百四十餘人武勇に携る者ハ數を盡して下し遣す此外畿  
 内ハ山城大和攝津河内和泉紀伊中國九州の兵都合十萬餘騎大將軍六人宗徒の侍

二十餘人先陣後陣を定む先々々と思ひくハ駒をはやめて下りけり中ハ武  
 藏國住人長井齊藤別當實盛ハ元加賀國の者よて今度特ハ勇て下りけり神功皇后  
 より天下丞相の合戰廿二箇度十萬餘騎の軍兵の一方ハ進を闘ハ此度とも七箇  
 度ありさきども大將六人よて打立事ハこきハはじめなり六將軍十萬餘騎を卒し  
 て浴中を出られければ異國ハしらず我朝ハ何者ハ手向ハすべき源氏等ホまじ  
 ひハ此度乱を起し今度跡形もなく滅びかんとするあらゆハしの事ヤとぞ京中の上  
 下等ける先陣ハ北陸道ハあり今津海津を打過て荒乳の中山ハありつて天熊の  
 國境を越て敦賀津ハ着よけり但馬守經正ハ詩歌管絃ハ長じ給へるうへ情ふのき  
 人よてあぐる乱の中ハも心を澄しつハ四五人相具し小船ハ忍び乘て竹生嶋ハ参り  
 玉ハ通夜し琵琶をとり寄玉ハ樂二ツ三ツ彈じて後ハ上玄石上と云秘曲を彈じ玉  
 ふ社壇のうへより白き狐出來り庭上ハ遊んで經正の方を守りけるこそ不思議な  
 馬守ハ琵琶を聞て神明の化現と忝ふく思けきハ所願成就疑ハ和光利物の思ハ有難くて  
 千早振神ハ祈のりなへバやまろくも色のあらハせにけり 經正  
 とぞ詠じ給へり其後狐こんくと啼て社の後へ隠れにけり遂ハ其琵琶を竹生嶋  
 の明神に奉らせけり琵琶もいみドき名物なり樂も目出度秘曲也主も究竟の上手

かり明神納受し給へば靈瑞更ニ新かり末々のもしく思しけるふ夜も既に明さん  
とす名残はらくく惜けきど經正は燧城も覺束ふしとして郎等ともを相具し沖の  
浪をこぎ分て海津の浦へぞ着よける

俱梨伽羅獄源平對陳

木曾義仲ハ六動寺の國府より打上て盤若野の御河瑞へ着にけりこゝに軍議あり  
けるハ平家ハ多勢味方ハ無勢かりかの礪並山を越せて松永邊柳原小矢部の河原  
へ打出ちバ馳合の軍あるべし馳合戰の習ハ必勢による事なきバセトキ大事  
リ其故に源氏礪並郡俱梨伽羅山の麓陣を取らバ平家ハほむに向ふて峠を去て馬場  
の邊に陣すべし其時義仲搦手へ廻りて追手搦手の南北より攻附て平家を俱梨伽  
羅の南谷攻落さんと計策ありと軍議一決ちたまひたり一がと一して平家其  
策に落入一萬八千餘騎の軍兵俱梨伽羅谷の南に落入先に落すものハ今落すもの  
に踏殺され今落すものハ後に落すものに押殺さきて尸を積ハ實に目もあてら  
れぬかりさまふりける斯て平家ハ礪並山を落さきて加賀國宮腰佐狼嶽の濱に陣  
を取旗を上よて佐狼嶽山に赤旗少々指上たり一が又こゝにても出水の爲多く兵  
を失ひ散々破せて敗走させハ實に無慙のいたりなりなる

真盛討死

平家の侍士武藏國住人齊藤別當真盛ハ七十有餘に年闌たり今ハ後世期する事  
終に逢るべき身はあらず何國にて死なん命ハ同事と思ひ切て只一人進出て死  
生知らず戦ひたる木曾の手に信濃國住人手塚太郎光盛といふ者あり真盛を目懸  
て歩せよる真盛もまゝ手塚に目をかけて進てかゝり手塚近寄て誰人ぞ只一人殘  
留て軍したまふハ大將軍侍り侍り心懸ハ名乗せ斯申ハ信濃國諏訪郡の住人手塚太  
郎金刺光盛といふ者なり能敵ぞ名乗給へや組たまへといひ懸て互ハに駒を早め  
たり真盛申するハア、去者あり思ふ子細ありて名乗まじ汝を嫌ふにあらざ只首  
を取つて源氏の見參に入よ能所領の價なるべし徒に淵瀬に捨べかり木曾殿ハ  
見知り給はんする也思ひ切たせバこそ只一人留て相戦ふ敵ハ嫌ハ軍の習ハ勝負  
をすること面白より合せ手塚といふ俣に弓を捨双方いどみ合て手塚其首を斬  
木曾義仲の前に持行申けるハ光盛こそ癖者の頸を取つて候名乗と申せハ存する  
旨あせバ名乗まじ木曾殿ハ御覽ハ知るべしと計り終に名乗らざ侍士りと見せバ  
錦の直乘を勝たり大將軍らと思へバ續く勢あり京家西國の者らと思へバ坂東聲  
あり若きものらと見せバ面の皺七十餘に甞めり老武者かと思せバ鬚髮黒トて盛



と見ゆ何者の首ふりと申す木曾殿打宋衰武藏の齊藤別當にやあふんと樋口ハ古同僚見知りたるふりとて召せたり髪をとつて引仰げて一ト目打見て涙をす  
と流て穴無慙やふ真盛にて候也鬚鬚の黒きいと問ひたまへ樋口さきハ  
其事思出らせ侍べり真盛日頃申置候かハ弓矢取身ハ老體にて軍陣に向ハんに  
い髪に墨を塗らんと思ふ也其故ハ合戦からぬ時たよも若き人ハ白髪を見てあ  
どる心あり況戰場に進んとすせバ古老氣ふハと惡み退時ハ今ハ分に時ハと護  
らん實に若人と先を諍ひたるも憚り又敵も甲斐ふきものに思へり悲きもの  
ハ白髪にて侍る俊成郷速懷の歌に

澤に生る若菜ふれねどいづらに年をつかにも袖ハぬせけり

と詠せ侍るとりや人ハ聊の言葉にも後の形見を殘置べき事にあん侍る也といひ  
に違ハぬ墨を塗りて候ひなりと申奉りなせバ木曾殿も幼き時七日真盛に養ハ  
せたまひなせバ其厚情いかてり忘せべきとさめぐ泣せたまひなるとぞ

平家落都

平家ハ宗徒と憑たる真盛討死して大に力を落し成合を引し篠原に陣すきハ源氏  
ハ尚も押歩せ所々に合戦しけきバ平家利を失ひ去る四月の下旬にハ十萬餘騎オ

りハ七萬騎亡ひて今六月の上洛にハ三萬騎にハ遇さりなり平家數を盡して下  
らせたるに期く計せぬること無慙なせ安宅篠原の並松の間ハ竿結渡して切懸る  
首三千七百六十人とぞ註しける其上木曾殿にハ山門の大衆味方オ奉りなせバ  
平家の一門主上をばどめ建禮門院いづせも都を落失くまひぬ

木曾狼藉焼注寺御所

去る程に平家一門公卿殿上人衛府諸司百八十人官職を止らせ平大納言時忠郷父  
子三人ハ此中漏たり十善の帝王三種の神宝返入奉るよハ人の計へ仰違ハ  
せたるによつて八月十日法皇蓮華王院の御所より南殿へ遷御し給ふ其後三  
條大納言實房除目を行せたり木曾冠者義仲左馬頭にありて伊豫を賜り然るに平  
家ハ讚岐國屋嶋に在りながら山陽道を討靡して都へ攻め上ると聞へりハ木曾  
義仲こきを聞て軍將を遣して備中國水嶋に陣を取つて兵船一千餘艘を調へ壽永  
二年閏十月朔日水嶋に源平合戦を企つ然るに京都にて藏人行家謀叛して義仲を  
謀せんと計るよハ樋口兼光より知らせなせバ木曾大に驚きて平家を打捨て京都  
へ歸り軍兵を養ふため種々乱暴をなすにぞ終に院宣を以て其舉を鎮めんとせ  
しに却て義仲禮義を乱しける上法皇の御所に火をかけ奉りなせバ平家にまさる

乱暴なりとて皆義仲を恐せむるをぞ

頼朝賜征夷將軍宣旨を奉

去る程に兵衛佐頼朝上洛輒かどぞとて鎌倉に居たり征夷大將軍の宣旨を下さる是によつて兵衛佐頼朝ハ木曾が狼藉奇懐あり早く追討すべしとて蒲御曹子頼九郎御曹子義經兩人を大將軍として數万騎の軍兵を差上せらる大手の大將軍蒲冠者範頼搦手の大將軍ハ九郎御曾子義經尾張國熱田より相分て宇治勢多へ向ひたり時に元暦元年正月廿日大手搦手宇治勢田に陣をとる九郎義經河端に押歩見たまへい橋板を破り取つて向かの岸に垣楯を捨て櫓に構たり水ハ増て底見へず其上乱拵逆茂木隙なく打て大綱小綱引張て流し懸たせバ齋鴨杯の水鳥も輒くくゞり通るべしとも見へさりける

高綱宇治川先陣

去る程ハ直實大音揚て云けるハ抑此川を固たる輩ハ木曾殿の樹根の郎等ハいよもあらハ一旦付從ひたる人どもよこそあらん命ハ惜き習也詮あき合戦ハ與力して大事の命失ふも落ハ助んと云儘ハ引取く放箭ハ木曾殿の郎等に藤太左衛門兼助真逆ハ射落さることを始として水練の者あらハ防矢射んとて五人進寄つて

散々ハ射けせい多の郎等手負討きよけり其間に佐々木ハ郎等ハ常陸國の住人鹿島與一とて無双の水練あり鎧拔置裸ハ成腰ハ鎌を指手ハ熊手をもつて河の底ハ入良久しく沈潜りて乱杭逆茂木引落し大綱小綱切棄たり實の器量とハ見えたりけりさきとむいまた川を渡す者ハさしあ有べきと評定さまくなりけるハ畠山庄司重忠進出て申けるハ事新し此河ハ近江の湖水の下流今始て洪水したるに非ず春立日影の習よて山々の谷川の氷解比良の根高の雪消て水のりさ増せども水減する事あるべららず足利又太郎忠綱も高倉宮の御謀判の御時渡したり鎌倉殿の御前よてさしも評定のありしいこそぞか始て驚くべきハ非ず兼て馬の用意其事也重忠渡して見參に入んといふ所ハ平等院の小島崎より武者二騎駈出たり人々こそを見るハ梶原源太と佐々木四郎と也景季が装束ハ木蘭地の直垂ハ黒革威の鎧ハ三枚甲の緒をしめ滋藤の弓の中を取廿四差たる小中黒の矢負ハ練鑄の太刀佩て鎌倉殿より賜たる磨墨といふ名馬ハ黒塗の鞍置て騎たりける高綱ハ裾の直垂ハ小櫻を黄返たる鎧ハ鍔形打たる兜を着笛藤弓廿四差たる石打の征矢頭高ハ負暈物造の太刀帯てこそも鎌倉殿より賜たる生喰ハ黄覆輪の鞍置てぞ騎たりける誰ハ先陣と見る所ハ源太娘と打入て遙ハ先立けり高綱云け





るいいらは源太殿御邊と高綱と外人まなけせはらく申す殿の馬の腹帯以外は  
 緩て見ゆるぞ此川は大事の渡也河中にて鞍踏返して敵は笑れ玉ふふと云けせは  
 左もあらんと思ふて馬を止め鎧踏張立上り弓の弦を口は喉腹帯解て引詰くし  
 めける間は高綱颯と打渡り二段計先立たり源太たばあらしぬと安らち思ふて  
 是も打渡して渡ける馬の足綱よりりて思ふ様も渡させず高綱は究竟の逸  
 物も騎たせの宇治川早しといへども淵瀬を云ふささめかして急は渡し向の岸近  
 く成て高綱が馬綱は懸て足をさつと歩除けせ元來期する事なせは太刀拔大綱  
 小綱三筋颯と切流し向の岸へ打上り鎧踏張弓杖突て佐々木四郎高綱宇治川の先  
 陣渡したりやと名乗も果ぬに梶原源太も流渡り上りけり佐々木鎌倉へ早馬を立  
 何せ劣し負じと馳て行源太が早馬先立けるがいありたりけん足柄の中山は  
 て高綱が早馬先立ぬ三日と申し馳付て高綱宇治川の先陣と申たり同時は梶原が  
 使又來て景季先陣と申けり兵衛佐殿は安立新三郎清恒を召て佐々木梶原生たり  
 やと問玉へは其は左候と申す其後尋玉ふ事なして後日の注進に宇治川の先陣は  
 高綱と注さきけり佐々木梶原一陣二陣は渡すを見て秩父足利三浦鎌倉黨も高家  
 も我もくと打渡り渡しけりこゝは木曾が方より信濃國住人根井大彌太行親と

名乗て垣楯表へ進み出弓杖つき敵の陣を見渡り九郎御曹子歟田代殿歟これらの  
 大將軍までぞおはすらん行親がけふの晴と思ひて十四束を取て番引堅て兵と放  
 つ畠山が騎たる鬼栗毛が吹荒をそ射通しける行親一の矢射擧て味方の運は早  
 盡みけり大將たる者が一の矢を放り弓筋の吉凶を様す一の矢射擧て二の矢  
 射る事な敵は鎧の毛見知れぬ先よとて搦楯の内へ引退く畠山が鬼栗毛も天馬  
 とははやりととも手負ぬれば疵を痛て弱けれは重忠馬より下前足二ツ取て妻手  
 の肩は引懸て水の底を潜りたりける外目もは早畠山は流れぬと見ける只一度弓  
 杖衝浮上て息をつぎ又水の底を潜りて向の岸へ渡けるは九郎義經宣ひけるは今  
 度大將軍として郎等は先陣を渡されて二陣は續ん事然るべからずとて橋より引  
 下て橋小島は馬をひかへこゝは水早けれども遠渡なり渡せくと下知し給へば  
 我もくと進ける是は大事の河に馬杖を組健馬をハ上手は立弱き馬をハ下り  
 立よ馬の足の届ん迄は手綱をくりて遊せよ馬の足はづまは弓手の手綱を指甘て  
 妻手の手綱を縮よ四居は騎こほれて遊せよ手綱強く引て馬は引れて誤すな尾口  
 沈み前輪はすがれ馬は石突さすな常は内鏡を合せよ物れら渡ると見るならは敵  
 定て矢余作て射るらん敵は射るとも射くへすな相引して鎧を射らるる痛く伏

て手變射らるむ射向の袖を指ぐさせよ物具は透間有すな水強くして下らん武者  
をバ弓の弭を指して取付て游せよ曲尺は渡り過すな馬の頭を水面より引立て置す  
りり弓の本管を打懸て曳音を出して馬より力添よ渡せよ者共く下知つ  
真先懸て渡されたり是よつて二万騎餘一度は颯と打入て渡りければ漏水も  
無けれ前後の水こそ何れも溜りず流れける大勢河を渡りぬれば敵ハ叶ハドと敗  
走す其時残りず河を渡り千騎二千騎或ハ二百三百七百八百思々水幡醍醐路よ  
かうつて阿彌陀峯の麓より攻入もあり或ハ小野勸修寺を通じて七條より入る  
り或ハ櫃川を渡り水幡山深艸里より入るもあり或ハ伏見尾山月見岡を打こへ法性  
寺の一二ノ橋より入るもあり道ハ互まかハれども同ノ都ハ亂入行親親忠字  
治橋を引て防戦ふといへども義經河を渡りて合戦すれば水曾勢忽ち敗れて四方  
は馳散すよし使を水曾が許さ立れば義仲大に驚て先使者を院御所へ奉て申ける  
ハ東國の凶族已に宇治川をわたし都へ攻入候急醍醐寺邊へ御幸あるべしと申  
たりければ更ニ御所は出御有べからずと仰遣されける義仲ハ敵既ハ伏見深草へ  
責來れりと追々注進申ければ臨幸の事を打捨門下ニ騎馬して罷出ぬ法皇ハ水曾  
が退りを愧みひて其日ハ門をかたく鎖して兵を入されけり

巴女力戰殺内田家吉

水曾ハ五條内裡に歸て松殿の娘十七まならせぬ美人は名残を惜み時を移ける  
は越後中太能景馳來つて敵ハ既ハ都ハ亂入たりいかは閑まて打解ぬふ弓矢取る  
身の心を移すまるとハ女ハ只今恥見ぬハん事の口惜さよとて今年三十六に成け  
るか椽より飛下り腹掻切て失さけり加賀國任入津波田三郎も此由云ひければ  
出ざりければ御運ハ早盡ぬひけりとして此も腹切て臥まければ是非なく百騎斗  
を卒して五條を東へ油小路を筋違ハ六條河原へ出たれば根井行親権六郎親忠等  
二百餘騎まで水曾に行逢ひ主従の勢三百騎七條河原法性寺柳原を見渡せば東軍  
隙を争ふて馳せ來る義仲申けるハ合戦今日を退とす身をも願み命をも惜まん人  
々ハこゝろみて落べし戰場に臨んで逃走りて東兵は笑はれは後代の恥ならめと云  
ければ行親親忠老て死するハ兵の恨なり其懸を喰て其死を去がるハ又兵の法に  
といへりこゝろ源九郎義經これを見て三百餘騎結寄ければ敵兩方へ相分れける  
を四方へ馳散し箭先を調て射取ければ義仲が軍忽ち敗れて六條より西を指て馳  
走る水曾が軍將三軍の方圓を立今を際と戦ふといへども義經又必勝の術を廻ら  
し強大の兵を退けり義仲左右の眉の上を射られて矢二筋折懸て院御所へ歸參し



佐々木権原  
宇治川を渡  
るの図

けるは少將成経門を開て鎖を指たれば再三叩押ける所は九郎義経梶原景時澁谷重國佐々木高綱等十一騎鞭を打て響を並べ矢前を揃て放射ければ義仲堪すして落て行義経の軍勢北るを追て攻立る其間義経院参して法皇を守護す義仲はこかりこよて打敗られ東をさして落けるが四宮河原え左右を見とへ備へ七騎残りたり木曾が御内は今井根井樋口樞とて四天王と聞へ外は義仲が乳母は中三権頭が娘巴といふ女あり一方の大將軍として更は不覺の名を取らず今井樋口と兄弟ありて武勇万人は越たり巴は内田三郎家吉をとつて押へ鞍の前輪は攻付く内甲は手を入れて七寸五分の腰刀を拔出し引仰めけ首を取刀も究竟の銀なれば水を播より尚安し義仲は早運盡ぬれば我討て後義仲こそ幾程命を生んとて最期は女を先陣に駈させたりと云れこそ恥かしけれ汝はこれより暇を遣す疾々落れとぞ宣ふ巴申けるは我幼少より君の御内は召仕れ進らせて野末山の奥までも一ツ道と思ひ切侍り今うける仰を承まはるこそ心愛れ君いかも成ぬらん所まで死を一所に成んと詢ければ義仲誠まこそ思ふらめども我去年の春信濃を出し時妻子を捨置又再び見ずして永き別の道に入ん事こそ悲けれされば無らん跡までも此事を知らせて後の世を吊はしやと思へは最期の伴よ

りも然るべきと存るに早く忍落て信濃へ下り此有様を人々も語れ敵も手繁く見ゆ早々と宣へは巴名残はさまぐ惜ければと主命は随ひ落る涙を拭ひつゝ上の山へぞ忍びける粟津の合戦終て後鎌倉殿の御沙汰として和田小太郎義盛の妾となりて男子を産む朝比奈三郎義秀といは是也けり其後和田合戦の時朝比奈討れて後巴は泣々越中へ越へ出家して巴尼と成佛は花香を奉り主親朝比奈が菩提を吊ひ九十一歳まで保て臨終目出度して終を取れけるとぞ

木曾義仲於粟津原戦死

源範頼ハ勢多の手の大將軍たりければも橋ハ引たり底ハ深し渡るべき様なれば稲毛三郎重成榛谷四郎重朝を先陣として田上の供御瀬を渡つゝ石山通は攻上り今井四郎兼平五百騎まで國分寺の毘沙門堂は陣を取たりけるが且は防ぎ戦けり方等三郎先生義弘こよよて討れぬ東軍三万餘騎の兵雲霞の如くなれば防難かりしうへは宇治手既敗れて軍兵都へ亂入ると聞へければ兼平心弱く覺て木曾殿ハ北國へ趣ぬはんと思ひければ湖の西の渚を三百餘騎まで北へ向て歩行義仲ハ關山關寺を打過て東を指て行程は粟津原打出濱まで行會ぬ木曾云けるハ都までいかよも成べかりつるに今一度互は相見んとて多く敵は後を見せ是まで來

侍りて語て泪ぐみ給ふ今井も勢多まといひも成べく候へども御向衛思東なく  
 根井も討れぬ身も日に疵を被り心疲力盡て進退歩をうらなふ首を敵の爲小  
 得らるゝ事名將の恥二軍敗れ自装するハ猛將の法なり申ければ兼平答て勇士は  
 食せず飢ず疵を被て屈せず軍將ハ難を遁れて勝を求む死を去て辱を決す就中平  
 氏西海は在將軍北州は入ぬ天下三分はして海内發亂せんか其時天運は乗  
 て義兵を揚給へまつ急で越前國府まで遁れ給へ兼平こゝまで敵を相防べいと云  
 て旌を揚げれば勢多より落來る者旌を見て二十騎三十騎聚ければ四五百騎及  
 べり兼平力を得左右を顧て各恩を報じて命を捨し事此時は有防矢射て落延し奉  
 れど申ければ五十餘騎の輩心を一ツまゝして西の山を後み宛東の濱を前み得て矢  
 箭を取けるは東軍七百騎攻來て開を發す又後は續て甲斐源氏一條次郎忠頼板垣  
 三郎兼信七千騎まで先陣は進み粟津濱は打出たり木曾赤地錦鎧直垂は薄金とい  
 ふ冑着て射残りたる護田鳥尾の矢負と名乗けるハ清和帝は十六代後胤六條判官  
 爲義の孫帶力先生義賢次男左馬頭兼伊豫守今ハ朝日將軍源義仲生年三十七甲斐  
 一條と見るハ僻目ウ雑人の手よけんより組や組とて鬻を双て跟將たり一條次郎も

伊豫守頼義三勇新羅三郎義光の孫武田太郎信義が嫡子ハ木曾と一條と魚鱗鶴翼の  
 戦をぞしたりける東兵ハ長蛇の軍法ともつて頭を打バ尾を以て防ぎ中を支ハ首  
 尾をもつて包む木曾も中小取込らむと散々小戦へり早八十騎討れけりこゝま千  
 葉介經胤大將少て三千餘騎木曾と中小取籠て透間もななくこそ戦けき思ひ切たる  
 木曾なれハ命も惜ず振舞けり散々ハ耻破つて後へ通て見れば又多く討れて二十  
 騎斗よぞ成ふける次ハ大將軍蒲冠者範頼七千餘騎よて木曾を中よこめて攻立る  
 木曾ハ敵の大勢ハ圍れおぐら追つ返しつ粟津原より引退きく從者落ぬ或ハ討  
 れぬる程ハ主従二騎に成よける去年六月木曾北陸道を上りしハ五萬餘騎と聞  
 へしあり今ハ中有の旅の空獨行ある道おきハ想像こそ哀おれ今井申棟ハあの向  
 の岡ハ見ある一村の松蔭に立寄心閑ハ御自害候へ其間ハ防矢仕りて頓て御供申  
 べしと申上まば木曾ハ今井と分きて馬を靜に歩せ行頃ハ元暦元年正月廿日の事  
 おまば峯の白雪谷の水も解きりけり向ひの岡へ直違小氷柱結べる篠原と過深田  
 小馬を馳入て打とむく行きりけり馬も弱り主も疲れけりあをれども甲  
 斐ぞあき身の果あらめ木曾ハ今井や續と思ひつ後へ見返りたりけると相摸國  
 の住人石田太郎爲久が能引て放矢ハ内甲を射られて額を馬の頭ハ當て俯伏に

けり為久が郎等二人馬より飛で下り深田に入て木曾を引落し頓て首を奪にけり  
今井こまを見ても今を長期と観念し残る八筋の矢よて敵八騎射落し太刀を  
振て申けるハ日本一の剛者主の伴に自害をもぞ是見習へや東八箇國の殿原と  
て太刀の鋒口はくハ馬より逆小落てぞ死よける兼平自害の後ハ粟津の軍も無  
りけり樋口次郎兼光は十郎行家を討つる爲ハ河内國に下りたるが木曾殿早討れ  
ぬと聞て上洛を鳥羽作道の遣よて九郎義經の軍兵に生捕れけり木曾が首ハ洛中  
の大路を渡して左獄の門よぞ懸よける樋口も共ハ斬れて今井の楯高梨も共ハ義  
仲と同一懸らきたり何者の所爲よ獄門の木の下に札を書て立たりけり  
信濃ある木曾の御料の蕎麥討てたゞ一口ハ九郎義經

鷲尾標一谷鶴越

平家ハ山陽道南海道と悉く靡て軍兵十萬餘人に及び木曾討れぬと聞へハ平  
家ハ讃岐の屋嶋を漕出とて長津の一の谷小籠ける其頃法皇八條鳥丸の御所  
平家追討の御祈り九郎義經を院御所へ召て我朝の神宝三種の神器を都へ遷入  
奉れと仰含れける義經畏いと安き小候べきとてあり立たりたゞ法皇御嬉氣小  
思召れけり生田の追手の大將軍ハ蒲の冠者範頼搦手の大將軍ハ九郎義經丹波越

にかりりて播摩國三草山に向ふ平家の大將軍ハ新三位中將資盛左中將有盛備  
中守師盛副將にハ平内兵衛清家江見太郎清平と始とて七千餘騎にて陣を取る  
九郎義經さうバ夜討小せよとて一萬騎にて三草山を越西の城戸へと打あもハ平  
家ハ明日の軍とて甲を脱ぎ腹を枕とて打重り前後も知らば寝たりたる義  
經弁慶を呼びて例の大續松用意せよと宣ふ即道の家々小火を懸けハ火焔  
天よ耀き地を照らしけり山中ハあもハ驚き平家取物も取あへば裸武者にて逃  
走る源氏ハ軍の手始小門出よとて勇けり同六日の未明より武藏坊弁慶を召て  
此山路木陰茂りて道見へハ山の案内者尋んやと宣へハ馬に乗り乾に向ふて十町  
余り下りて谷底を伺ふよかきり小火の見へけり内に入りて申るハ鎌倉兵衛  
佐殿朝敵追討の院宜を賜り軍勢を指上せられ平家都を落て此山に籠る則御弟君  
搦手大將軍九郎御曹子此上の山にわたりまを案内者に参まとの御使に武藏坊弁  
慶とて古山法師の怖者来きり疾々参るべきなりと申此時鷲尾三郎義經の御  
前に参りて山中の木根岩角所々道知るべなとあてまつりけりバあくに始め  
鶴越の軍議をぞあたまいなるを此戦第一の先陣ハ熊谷次郎直實同小治郎直  
家ありける



生田之於  
て挽浄二  
度がけ  
の圖





生田森梶原二度駐

去る程小大手生田森と源長五万餘騎に固たる其勢の中に武藏國住人河原太郎  
河原次郎と兄弟あり河原太郎弟の河原次郎と喚び云けるは大名の我と手を下  
けねとも家人の高名をもつて名譽と我等自ら手を下げねば叶難し敵を前小  
置なぐら矢一つだ小射すして待居るは餘りの證なき次第なり我等は城中小紛  
入て一矢射んと思ふありされば千萬が一も生てぬらん車有つたし汝残て後の  
證人に立と云々を弟の次郎涙をもたらしと流して唯兄弟二人ありある者が兄を  
討せて弟が後小残り留りたきばとて幾程の榮花と保べき所々に討れんより  
一所むを討死をもせめてと生田の森の逆茂木を上り越城中へ入りありける  
哀むべし河原兄弟の終に敵のあめ討死むらるる此先陣を聞き梶原平三兄の源  
太同く三郎五百騎の大勢敵の中へ馳入り縦横無尽蜘蛛手十文字に懸敗つて颯と  
引て出ぬれば嫡子源太の見えさうりけり梶原等共に源太のいふと問ければ餘  
り深入りて討まきせまひて候やらん遙にも見えさせたまひ候はばと申されば  
源太は何国も有やらんと駈敗り鬼まらり尋る程に案の如く源太の馬を射させ歩  
立ぬなり盛の紅梅の籠にさし甲も打落され大童にて戦ひと二丈斗りある岸を後

に當郎等二人左右に立打物被て敵五人が中に取籠られて面も振らば命も惜まは  
あつど最後と攻戦ひ居ありとまきを梶原が二度駐とこそいふたりけり

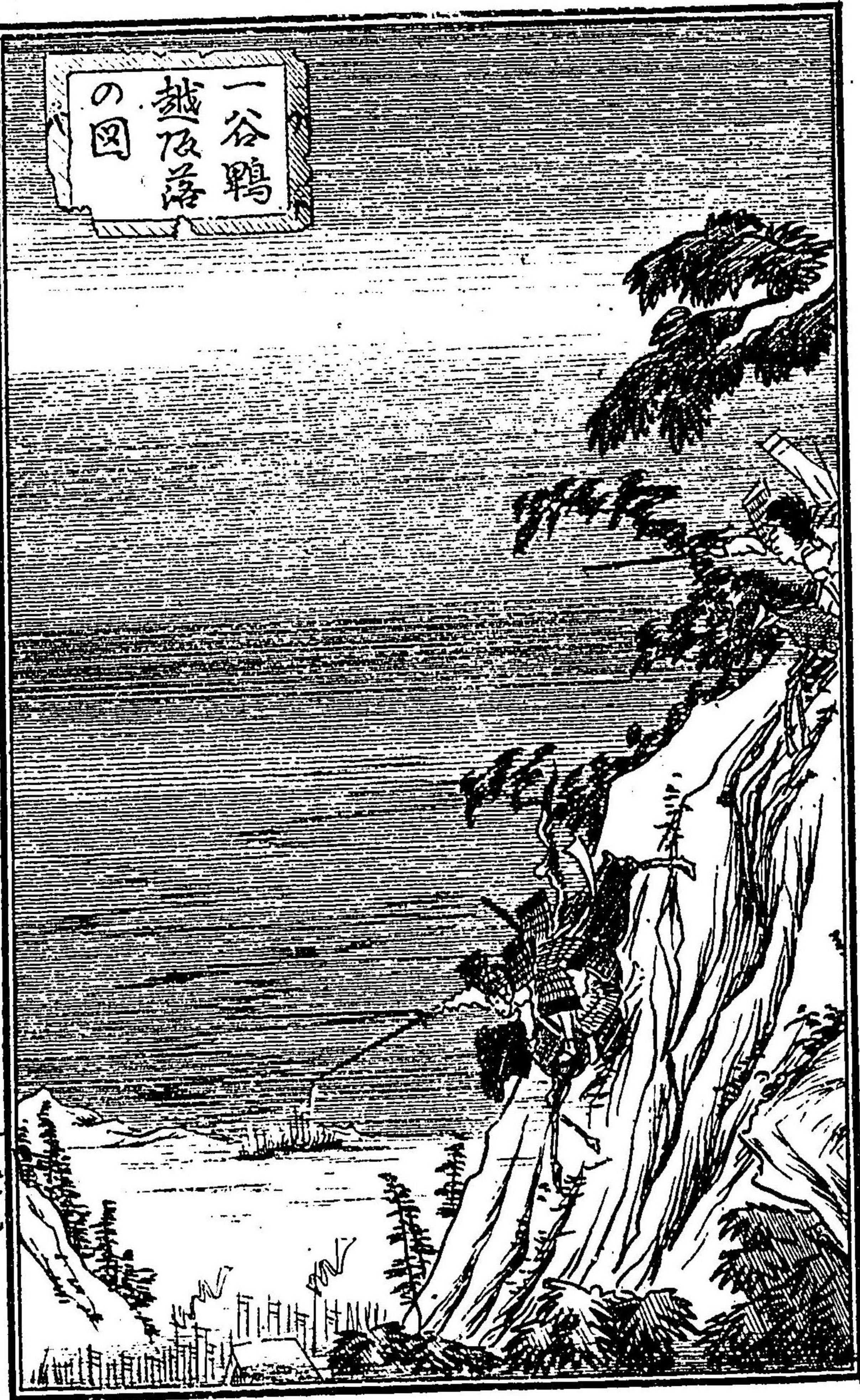
源義経落鴨越

元暦元年二月七日の曉九郎義経ハ鷲尾を先陣とて一谷の後鴨越へぞ向ひける  
残の雪の未消やらむ霞の衣の立覆ひ深山路深く征馬の足は任せて歩行たり名わ  
れや先と進みけるがまた夙暗き程おれば道の険く暫息をぞ繼小けるされとも矢  
合の時を定たれば明るを待た谷より下り嶺に登り押立打けるよ一谷の後なる小篠  
谷といふ所は人の音しければ近寄て何者ぞと問ふは名乗事なく散々射ければ  
此奴原は平家の雜兵一々搦捕て頸を刎軍神に祭れとて源氏も嚴しく射けむら  
こゝよて平家多く討れふけり其後鷲尾標してあるひは下り或は上り行程小辰の  
刺むらり又鴨越一谷の上鉢伏蔵の途といふは打登る兵ども遙に谷を見れば陣頭  
よの多く楯を双べ矢束をくつろげたり前ハ海後ハ山浪も嵐も烈しく左ハ須磨右  
ハ明石月の光も清き小追手の軍は半と見へて喚き叫ぶ聲射違へる鏑矢の音山と  
震し谷を響し赤旗馬印立双べて春風は靡くけしきん劫火の地を焼くうとぞ覺へ  
たり既小時至れり追手に力を合せんとて見下せば實小上七八段もろりの小石交

りの白砂馬の足とぐまるとるべき様さらし歩行はとも馬も落さるべき所  
非を佐藤三郎次信より大鹿毛といふ名馬小騎せ大將義経の大夫黒といふ馬小乗  
かへて谷へ打向けて鹿の通路の馬の馬場なるを各落せしと進み給ふ兵どもわ  
れもくと馬を谷へ引むけて心の先陣とはやれども流石は名高き嶮難むら  
手綱を引へて猶豫ふ馬も恐れし脚躑も互に顔と顔とを見合せて憚れ果てぞ  
居たりける大將宣ひける一馬の落様をも見一源平の占兆なるべしとて章  
毛の馬は白覆輪の白けき白旗に准へて源氏とし鹿毛も馬は黄覆輪の赤けき  
の赤旗に准へて平氏とて道下も各木間より見おろせ小石交りの白砂地を七八  
段じりり轉ぶともめく落るともななくまらしと下りつゝ巖の上は止りて息をつ  
ぎ暫有て岩の上より又宛轉下り越中前司盛俊が陣屋の後は落て源氏の馬は這起  
つ身振ひして峯の方を守り二聲嘶き小篠と喰て立たりける平家と印を馬の身  
と打損じ臥て再び起ざりけり城中よりこそを見敵の寄れりこそ鞍置馬の下り  
たるこそ騒ぎ惑ひける所御曹子の源氏の占兆こそ目出さけれとて白旗五十流打  
立させて宣ひけるの脚躑して時を移さべからず巖を落さる手綱敷多あり馬は  
乗ハ一ツ心二ツ手綱三ツ鞍四ツ笠といふて四の習あれと所詮は心と以て騎物ぞ

若き殿原はこれを習へとて義経が馬の立様を見て本とせよとて真逆は引向け續  
けやと下知をなし馬の尻足引敷せ流落し下したり三千餘騎の兵とも大將  
軍はつゞけとて白旗三十流城中へ打靡せ響と双べて手綱をくいくり同じやう小  
尻足おろせとさつと落して壇の上を落止る夫より底を覗て見れば巖石峙て昔  
蒸り響は双の双に草覆る様なればいとむいぶせきうへ下へ廿丈もやあらんと見  
へ渡るこれを落さるべきやうもなし又上へ登るべき便もなければ互に堅陣を吞で  
思ひ煩ふ所の三浦薫は佐原十郎義連進出て我等甲斐信濃へ越て狩し鷹仕ふ時  
兎一ツ越走りても鳥一羽飛んでも傍輩に見落されじと思ふるの之に劣らじ義連  
先鋒はらんとて手綱をくいくり燈踏むり只一騎真先兎て落かくる大將こそ見給  
ひ義連討をも續けや者共くと下知して其身も續て落されけり畠山の赤威の鎧  
は護田の鳥毛の矢負三日月といふ栗毛の馬に騎たりけり此馬に一鞭當れば三日  
月の影の有けき名を得たり壇の上にて馬より下り差窺ひて申けるはこゝは大  
事の悪所を馬轉して悪りるべし此巖石よて馬損じては不便な日頃ハ汝よりり  
き今日ハ汝を孕さんと馬を勞り手綱腹帯より合て七寸は餘て大は太き馬を十文  
字は引くらげて鎧の上に搔負て椎木と壹本根本よりねぢ切杖に岩の迫を志づく

一谷鴨  
越及落  
の國



とこそ下けきこきを見えて三千餘騎手細かいくり鐘踏はり目を塞ぎ馬に任せ人に  
随ふて劣らじくと落しける小然るべき八幡宮の御計いごとて馬も人も損せむ  
落し果しぞ不思議かれ即白旗三十流焔と奉げ同時小鯨波をぞ作りければ山彦小  
答て天地も動くむりり矢庭小平家の城廓に乱入て堅横無盡蜘蛛手十文字小馳  
違ひ喚き叫んで戦けき城中小東西の城戸口むくりを防ぎさしも恐しき巖石  
より敵の襲來るべしと夢小も思ひざりなり打懈りて左右の城戸の弱くらん  
時加勢せんとて鎧甲脱置て小具足むりり居たる所へさつと寄出と時を作り  
たれば弓矢を取馬小騎隙もなく周章迷ひ味方の兵も皆敵に見えけき適馬小騎  
弓矢を番らる者も同士討して切殺され上成下に成て肝も心も身小添を途を矢  
ひて騒きふため形勢ハ魚の陸小上り宿鳥の枝を評ふ異ならむ御曹司下知し  
玉ひけるハ城廓ハ廣博ハ賊徒數をたらむ多官軍と滅さん事いと不便り館小  
火を放てこのたまハ武藏坊弁慶忽ち屋形小打入り假屋小火を放つ折節西風烈  
しくして猛火熾ん小城上吹覆ひ平家の軍兵煙に咽び火は責らきて今ハ敵を禦  
力尽て取物も取敢ず汀をさして逃て行清小走り藻汐小馳入て船小乗んと惑ひけ  
る助船も多し有けきとも然るべき人と撰んで乗けきバ次々の者どもハ得乗も多

く海は沈むもあり又焰は焦れ煙は巻れて灰とふる逃去るも見へされハ皆敵は討  
れける助くるハ希よしして亡るハ數しらぞ無懸といふも疎こきと鴨越逆落しと  
ハ云ありけり

知盛乗船知章代父命

去程小新中納言知盛那ハ濱辺へ落たまひし武藏国司にたまひます小より見知  
々る小や兒玉黨團扇の旗さして三騎喚て追りけ奉り中納言危ふく見へあまひ  
れハ御子武藏守知章中は阻て引組を落取て押へて頸を搦取たまひ尚敵の大勢の  
中小入てよき若武者多く討取たまひ終小あつよて討死をぞしたまふおまふよつ  
て新中納言知盛ハ井上といふ究竟の名馬小騎給ひ海上三町斗り弱せて船に乗り  
移りたまひけり

熊谷計敷盛平家公建討死

平將修理大夫經盛の御子若狹守經俊ハ兵庫の浦まで落延たまひけるを源氏の兵  
那和太郎に組んで討れたまふ同經盛の末子經俊の舍弟無官大夫敦盛ハ矢鷲毛の  
馬小騎給ひ只一騎知盛の乗たまひぬる船を志して浪上一町許り弱せて浮つ沈つ



漂ひたまふ御後より武藏国の住人熊谷次郎直實の哀れよき敵さふ組ハヤと清も海へ入らせたまふ者りな返したまふやと我名を名乗り討ち奉りたる世の入々の知る所あり其外屋嶋四国九州へ落たまひける平家の公達多くありける

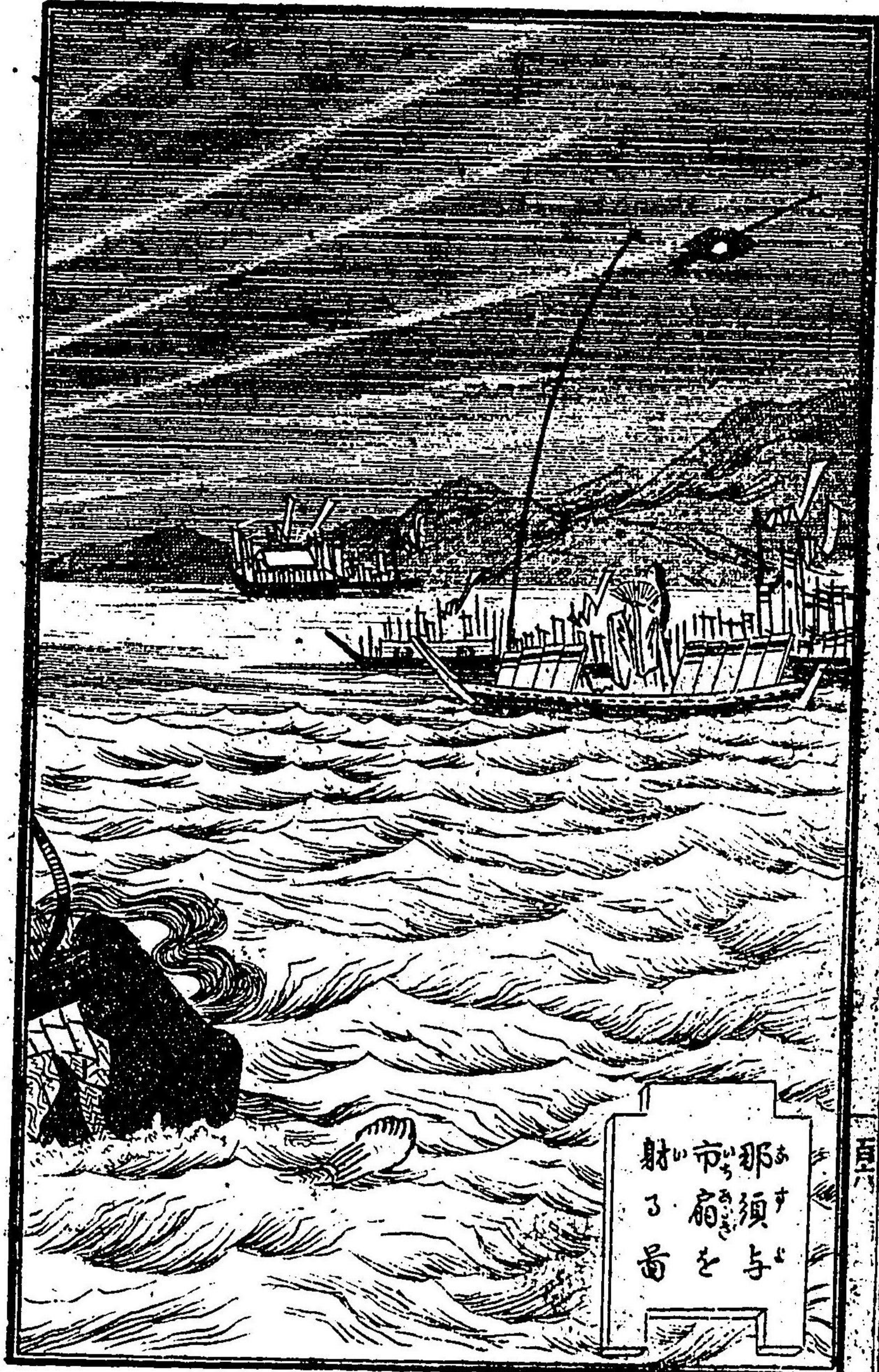
盛綱馬上渡藤戸海

元暦元年七月廿八日故高倉の院第四の皇子太政官廳に於て御即位あり神武天皇より以來三種の神器ありして御即位の例今度始と申す八月六日九郎義經左衛門尉に成て即使の宣と蒙りて九郎判官と申あり是れ一の谷勅賞とぞ九月二日大將軍三河守範頼平氏追討の為西海道に發向に其勢十方餘騎軍船千餘艘にて室の泊り小着く同十八日平家の讚岐屋嶋に在りむら山陽道を打靡して左馬頭行盛と大將軍と一飛驒守景家已下下侍を相具して二千餘艘小備前國兒嶋に着く源平海を隔て陣せる車海上四五町に過ぎざりたり同廿五日平軍扇を上げて源氏を招き海を渡せといふ小船なく源氏も扇を以て招き合ふ源平進に見渡して其日も徒に晩にかり爰に佐々木三郎盛綱夜入つて海の淺瀬を漁民に聞知り羽朝弟

一番の先陣と海を渡りたりけせば右大將自筆御降文ありて伊豫讚岐兩國を賜か

梶原逆櫓論

同年十月十一日源義經宣言を蒙り檢非違使五位下に叙せらるを昇殿を許さる拜賀の祝義を申す是より大夫判官義經とぞ稱する同二年正月十三日義經ハ忝も勅宣を蒙り鎌倉殿の御代として其勢十萬餘騎を引卒して関字関を固たり判官殿の大物浦にて大淀江内忠俊を以て船擲して軍議ありけるに梶原景時申しけるに船に逆櫓と申物を立候ひて軍の自在を得様に候むやと申ける判官逆櫓とい何事ぞと問たまへい梶原答へて逆櫓とい船の船と艦へ向て櫓を立候其故い陸地の軍に進退逸物の馬に騎心に任せてかゝるべきい駈引べきい引安き事船軍は押早めつる所を押戻すい由々數大事に侍るべし敵強らぬ船の方へ櫓をもつて押渡す侍らぬ自在なりと申すを判官軍といふい大將軍後より駈よ攻よといふたよ心引退く軍兵の常なり況や兼て逆支度を拵へ置ん事勝利を得事也と宣へい大將軍の謀の良と申し身を全ふして敵を亡すを所要と申也前後を顧みず向ふ敵をかり討取んとて鐘を知りぬい猪武者とて危ふき事にて候と言を放つて申せば



那須市射  
須を  
与

判官すこし色變り和殿が大將軍たりん時ハ逆儲して百挺千挺の逆櫓をも立給へ  
義經ハ船へ思へんをば逆櫓といふ事聞事も思へと宣へハ席に列する大小名一度  
に咄と笑なり

那須與一射扇

源平の軍兵暫く息を縫て又戦いんとする所ハ沖の方より莊たてたる船一艘渚に  
向ふて漕寄る如月廿日の事おせハ春風に翻漑として柳の五重に紅の袴着て袖笠  
被たる女房あり又紅の扇に朝日の出たるを挾て船の船先に立てておせを射たす  
へとて源氏の方を招きける此女房といふハ建礼門院の後立の御時千人の中よ  
り撰出せる雜司に玉虫前といふ其時源氏方より下野國住人那須與一まかりいで  
扇の的を物の見事に射落たりんをハ敵も味方も声を揃へて射たりくと稱  
しけるとぞ

景清美尾屋關鐵

其時平家おせを見て本意おしとや思ひん弓持て一人楯突て一人武者三人落に  
上り源氏おせを寄よとぞ招きけり判官安からぬ事なり騎強なる若武者馳寄て蹴  
散せと宣へハ武藏國住人美尾屋十郎同四郎同藤七上野國住人丹生四郎信濃國の

住人木曾中次五騎列つて喚てかゝるおしは於て景清美尾屋の兩人甲の鐵引合て  
物別せおしけるおせを鐵引とぞ註せきたりける

佐藤繼信申死

平家の大將能登守教經ハ心も剛に力も強精兵の手利なり源氏ハ懸廻りくつて跟  
跡所を見濟し差詰く射ける矢に奥州佐藤三郎兵衛繼信ハ黒革織笠を着たるが  
首の骨を射抜せ君にかまつて一命を落しぬ

源平遠矢

明せハ平家ハ志渡浦は退く判官又八十餘騎にて志渡へ追ふておしをける平  
軍おせを見て源氏小勢なる中ハ取おめて討やとて一千餘人皆上り我討とら  
んと進みける去程に入嶋に残り止りたる二百餘騎の勢馳來る平家はを見てあ  
や源氏の大勢續たるハ何十萬騎なりん中ハ取おめてハ引退き皆船に  
お乗りよける

能登守最後

斯て平家の一門女房公達公郷殿上人に到るまで皆西海の波に消失せおしをける  
なりたまひたせハ能登守教經大童になり大手を播け船櫓に立出大音声を揚て源





氏の方より我と思ひん者あらば寄て教經組て眞にせよ鎌倉殿下り兵衛佐に一言謂  
んと思ふより寄せやよむと宣へとも寄物一人もなかりたりとぞホトに土佐國住  
人安藝大領實康ら子に安藝大郎實光とて凡二三十人ガ力闘したる剛者郎等二人  
從へ進み寄りける能登守古の志はらりと郎等二人を小脇にかへ生年廿六歳に  
て海へざんふと入たふ是に於て同四月四日判官義經合戦の次第注進して陸御所  
へ奏を去る三月廿四日午刺長門國赤間浦に於て平家悉計取大將軍前内大臣已平  
廣神藏内侍所無爲に入らせたまふ寶劔の嚴嶋神主景弘に仰て海底を探り求む  
とぞ注しまうしりける法皇大かに御感有り貴賤安緒の思ひなしかく喜  
び合はる

頼朝義經不和

同五月三日内大臣實定郷仰せけるい平大納言時忠先帝の一族謀判の臣と同意せ  
しむる条其罪輕からず然せとも前内大臣宗盛内侍所を抱て既に入水の所を再三  
止めて頭上に捧げて内侍所の神鏡を都に返し入るむを微忠にあらせやとて死罪  
を免せらせて流刑に定まりける此時忠郷散らせまじき書物を入せし皮籠を一合  
判官の手に取らせたまひんせし其書を鎌倉殿に見らせまじきため御娘を判官義

經殿に進めたまひぬ斯く平家ハ北國西國の合戦に皆滅びぬ前内大臣宗盛以下  
多勇いせぬ今ハ國々も鎮まつて人の往來も煩いふ都も貴賤安緒したりんせハ  
九郎判官神妙なりとて法皇斜めおもむき思召さる浴中の男女もあいを此人の世に  
て侍せかしと鎌倉にも聞へんせハ源二位頼朝郷宣まひなるハ義經が高名ハ何事  
を頼朝帷幕の中のもかりぶとを以て勝事を千里の外に顯ハし大軍を指登してハ  
そ平家ハ亡びて天下を纏りにせ九郎一人ハ争り世をハ鎮むべき夫は法皇  
の御慮も心得ず人のいふに誇て世を我終に計らひぬるハ不憎し人も多きは時忠  
の筆に成つてハの大納言を持扱ふも謂せさハ又世に恐をなさせ時忠ハ九郎を  
知に取るも不思議なり此体ならハ九郎鎌倉へ下りても過分の事ともを計りつら  
んが存外ハと宣まひんせハ始終中よならしまし世の乱せてハなるハんと私語  
る

源頼朝平宗盛對顔

同十七日九郎判官義經平民の囚人を相具して鎌倉に下着めせハ源二位頼朝郷宣  
殿ありんせどもいと言少なく打解たる景色さし義經も思の外に事違ひて合戦の  
事違るに及ばざりなり前内大臣宗盛郷宣庭を隔たる屋座を備たり頼朝郷宣

中に座して比金藤四郎能員を使として狙の上に大なる魚を置き利刀を相具して  
内大臣父子の前に置きたり是れ御自害しまへとの計畧あり大臣は思ひよりたま  
はず有らん悟る事もなく其終に見ての所居たまはんを内大臣を讃岐守と改名  
して九郎判官に返し預け置きたり

○土佐房堀川夜討

伊豫守義經は右大將頼朝と不和のよりかして私語あり兄弟ある上父  
子の契ありて殊に親しき深し去年正月に木曾義仲を追討せしより命を重んじ身を  
輕んじ源平度々の合戦して今年平家悉く亡びて天下鎮つて四海を證人を勤功類  
ひなく恩賞厚くすべき所にかざる子細にてかゝる意趣出来ぬらんと上下亦も  
く怪をよみ此事去年八月に口宣を蒙り同九月に五位大夫に成るるを右大將は  
申合せも何事も頼朝が計にたそあるべきに詔なきに逆心任せ致す事甚く狼  
藉也又平大納言の娘に相親を事謂なきを旁もつて心得ずと宣ひて打解まじきと  
思ひをぐる堀原平三景時渡辺船楯への時逆櫓の口論を深く意根に持て折を得た  
りとして謗言す平家の皆滅びぬ天下の君の御心任せ也但九郎判官殿よりい臆心  
の害あり殊に心剛にして謙畧勝をくり谷を落さる事鬼神所爲とも覺り一一定

敵ともありたまひ由々數大事かかど嘿々として頻りに絶しけを頼朝もいふ  
せく思ふふりとして追討の心を狭めたまへりたに於て土佐房昌俊事の心の仰を  
蒙り堀川夜討の企てませしも義經明智見破りたまへば土佐房昌俊六條川原に首  
を斬せぬたに於て三河守範頼兵六萬餘騎を引卒して義經誅戮の沙汰起りたる  
ホソウたてかりたる

○義經都落

同十一月二日伊豫守義經法皇御所六條殿に参りて忍びやか大藏卿義朝臣に  
向ひ義經畏て申やうの源二位頼朝が度々忠勤の奉公を忘せ由なく惡く思ふ事深  
し更は其意を得ず其誤なきよし聞直すと思ふ所いよく增長し侍る也今い思ひ  
死て京都よていらよも成べく存し候へとも君の御爲よも世の爲よも煩あるべし  
一まづ西國方へ罷下り豊後國の任人惟任惟義等が許へ始終見放さず合力すべき  
よし院の廳の御下文を賜り宸襟を休奉る度々の軍功争か思召忘せ玉ふべららず  
最後の所望只此一事は侍ふと播調申けをば義經即奏聞を法皇聞召進退思召煩ひ  
て大臣は仰らる其時左右の大臣議して云落中よて合戦及む朝家の御大事よて  
候へし軍將を外土へ出さる事穩なる事と奏しけをば申請るよ任て應の御下文



平家の源氏  
義経の船  
渡る図



を賜りけり義經さまを奉て宮中をたち出ぬ北の方い平大納言時忠の娘也日頃い志深く通ひつせども頼朝と不和なる後此女房は打解を平家を亡し時忠を罵とせしは璽の箱を乞得ん爲は意からま情を籠しむり也女房をとも義經をいよき敵と思らぬ密は行て事の様を窺はんと忍びてかの宿所の垣根を聞けむい側の女房は物語をとりて伊豫守殿の鎌倉殿は中惡く成て都を出玉ふと聞世をつししみていふ事も儘ならぬ一夜の契疎からず追積りぬる月日なき忍がく侍るふとや音信さるらんうらめしく人の心の強面かりけりとい

つらからい我もろともよきもあらぬとらき人の戀しらるらんかく打詠じてさめくと泣きけり義經さまを聞心かいらいながらけりと思ひけり今番いこし泊りて行末越方の物語互は袖をそ絞ける北の方宣ふい母まい死て別せ父まい生て別をぬ便もなき身のうへ誰り哀をかくしとも思はず然べく前世の契こそ遠らねいかなる有様よかすとも相具し玉へと歎けり伊豫守の實よさるべきよこそ侍を共義經い源二位と不和なるうへ日本國は誰か敵よあらざるべき今い身一つの置所さへなげむ何方へも落忍ぶべし心は任せぬ身の憂きよとて夜々なる曉の空出るも止まるもさこそ餘波惜らめと思ひ

てかりて哀をより去る程は同日卯の刻は義經院の御所は参りて云頼朝軍兵を指上せて追討の企てを發す速かよ時政實平を侍受て難雄を決すべしといへども都の煩ひ人の歎きとあるはよつて只今洛中を罷立退所也今一度龍顔を拜し奉るべきといへとも其體出陣の粧ひ恐をさすよあらぬ命存へん程は勅諭を書き奉るべからざるともうし上げむいことを聞人々或は憐れ或は惜とけり即ち罷出けむとも少しも人の患ひならぬ其出立は赤地の錦の直垂に萌黄威の笠を着て萬騎か二百騎を相具都を立出る凡義經京都守護の職威有て猛らるを忠有て私を深く武勇を勵て敵を者らる人望に相叶ひけむ老若貴賤惜み合ふて歎かぬ者いながらけり今度の妻問壯士の法を亂さむりなき生てい嗟らむ死てい忍ばむけり後世に至つても此人を借思ふ事い三尺の童子までも云難す也かきを義經は負といふかくて八幡の伏拜といふ所にて義經馬より下甲を脱ぎ弓を懸に於て死づきもろしけるい蘇もくも正八幡宮の源氏の姓神とならせ高祖頼義の告を蒙り野子遊がこきを八幡太郎と號す一天の護として四海を鎮る近年平氏逆亂盛なりし間源氏威を衰ふ事廿一年也今又平家の宿運尽て源家世を取義經四國九州は渡りて平氏を誅戮し罪ぬ其誤りなく犯す事なきといへとも舎兄頼朝諒許すよ

つて義経都を退く響い葎の水を離れ飛鳥の翼なきが如し頼朝心狭一人世を知らんと思ふ事神慮薄くしと掌を合せ伏拜みて打立けるかくて攝津國大物浦より船に乗つて九州は下り尾形三郎惟義を懸てまゝに止まらんをせむを叶すい鬼界高麗新羅百濟までも落行んと思ひ出帆しけるは折節十一月の事あるうへ逆風頻吹て寒氣烈しく大津荒く或い平家の怨靈はやらん海上所々船上り奇怪多かりけむ暫く風待して又船を出しけむともとりく波風荒ふして船を覆へさんと今い船を出すは便しとためらふ所は都へ北條時政土肥實平登りしと聞えけむ津の國警備の軍卒鎌倉の聞えを憚り進驅く驅來る遁るべきやうあけむび三百騎の軍兵思ひくは落まけり義経は白拍子靜を召具し大和へとこころさし宇多郡は一宿くし十二月十四日は春の花の名所と名も高きよしの山は入りよける

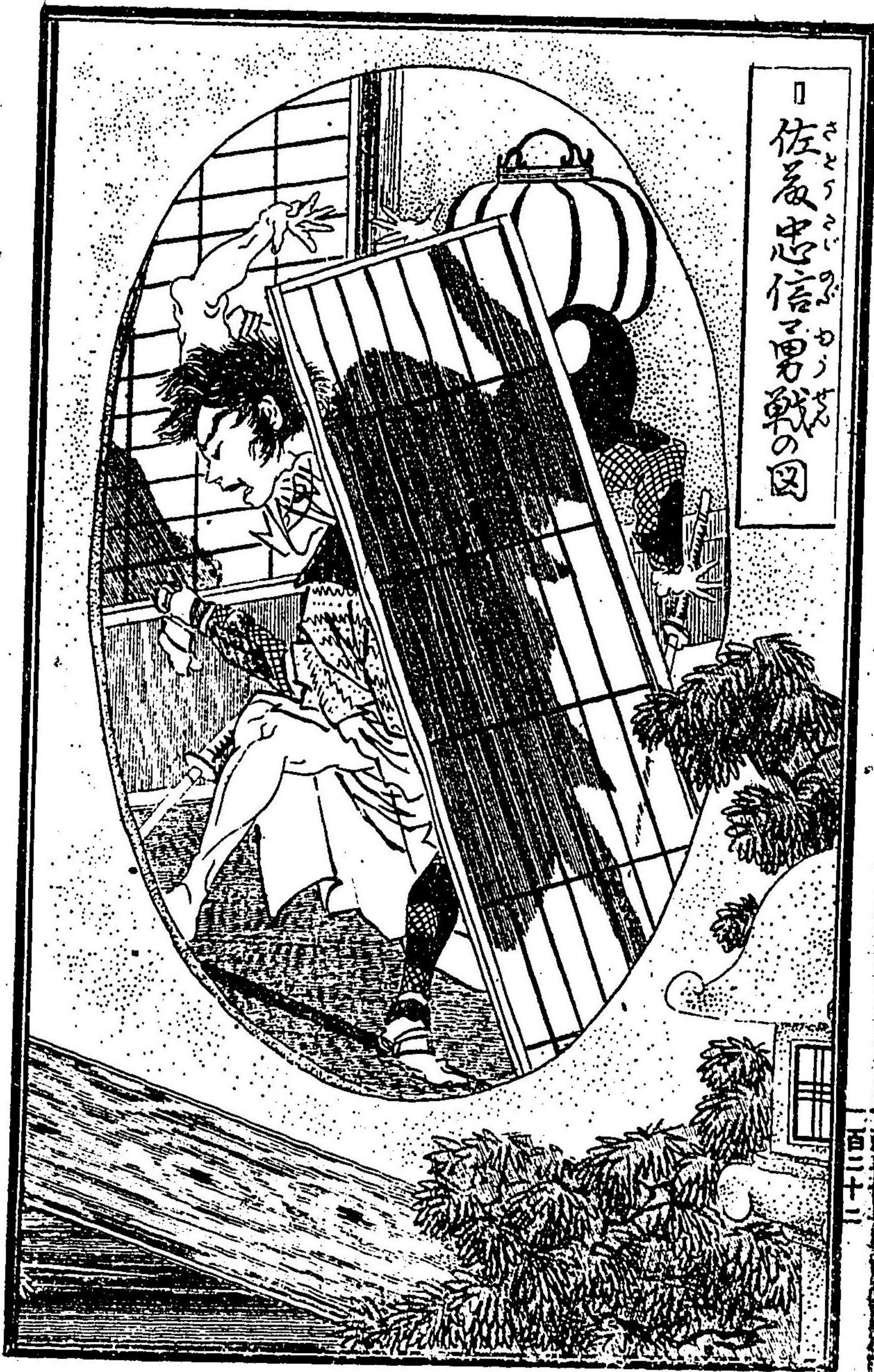
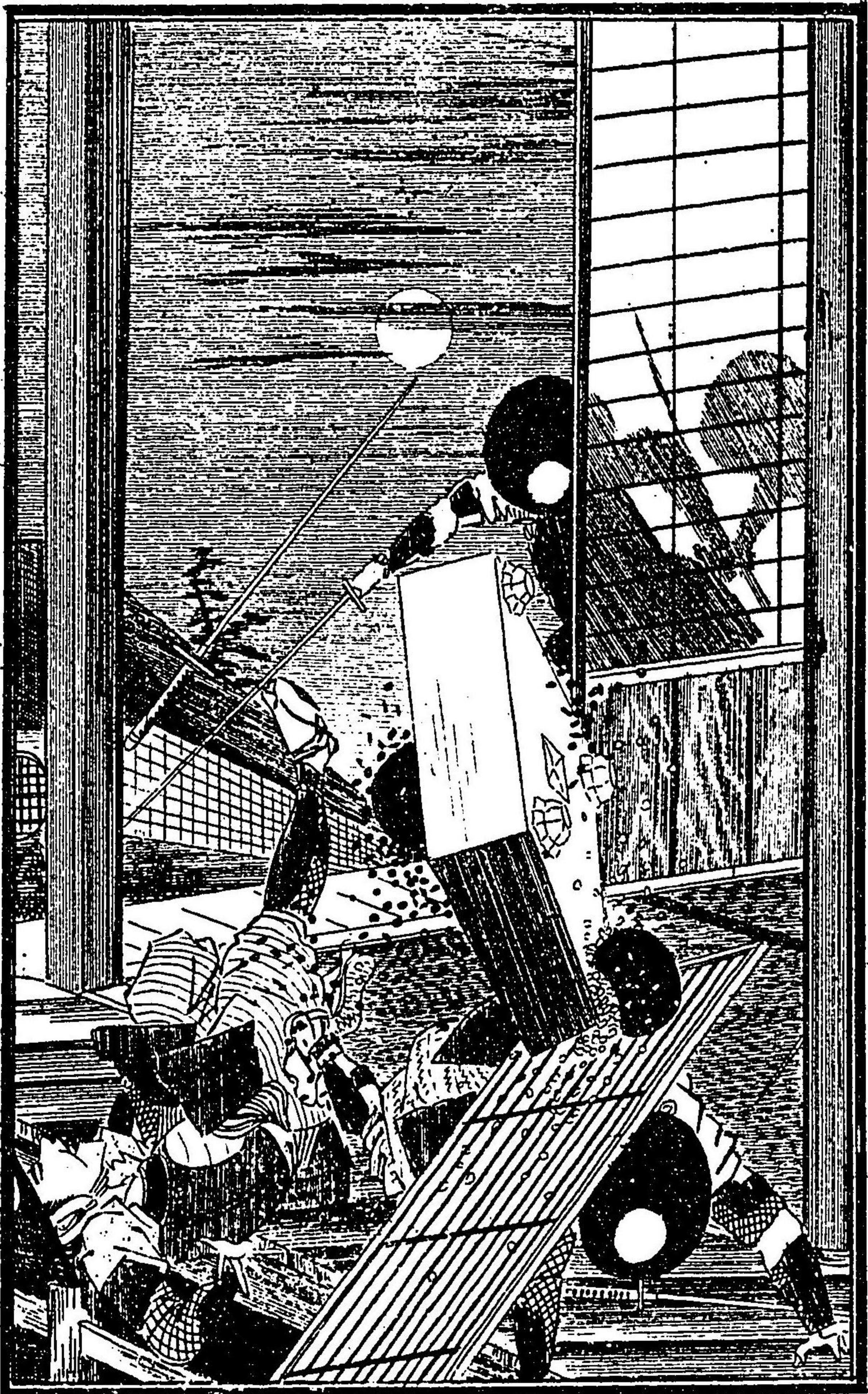
忠信謀吉野衆徒

明れい衆徒講堂の庭に會合して九郎判官殿の中院谷にをいさふり さや押密計取つて鎌倉殿の見参に入さんとぞ申しける判官の中院谷にをいしるるが雪群山に降積りて谷も小川も密なる駒の蹄も通いぬが鞍かにも附ぶ兵糧も持せみか人

疲きて前後もしらさず臥ふりいまど曙の事あるふ遙の林に鐘の声聞へけと判官殿に思召て侍共と召て仰らむけるは侵鐘の音過きて又鐘は鳴を不審ある院宣はよくどもおれは関東へ忠節として我に敵すると思へより其實否を糾すべしと宣へば常陸房武藏坊東大日堂の上より見渡せば寺中騒動して大衆南の大明に詮議して上を下へと返りたり兩人あはやと思ひとつてかへし敵ある矢頃みあつて候へと申しけむ判官殿おれを聞て東國武士が吉野法師かと仰らむければ皆々禁の者にて候と答ふ扱ハ叶はば彼等ハ所の案内よく知つらん愚所に追かけられてハ叶ふまじと仰ありける爰に佐藤庄司が二男藤原の忠信君と安々落しまるらせ身の雪中の山に止まり吉野法師と戦死する

忠信戦死

去程ふ忠信ハ十二月廿三日ふ忍んで都ふのぼり洛中ふ入て判官殿の御行衛を尋けりされども人まちくふ申しければ一定をうらすあるひは吉野川身と投給ふとも或ハ牝陸道みかり陸奥へ下り給ひけるとも申て定めさりけむは都ふて日を送り十二月廿九日ふまりけり忠信他事よく思ふ女一人四條室町ふありけるが夜ふけてひそり尋行けり女悦び斜あらす一問なる所は隠し置やうくみ



佐々木忠信三男戦の図

いふかりける此事六波羅北條四郎時政に聞へければ時刻を移さざり二百騎の軍勢  
まて押寄より忠信の聲は驚き四方を見まはす敵はみちくしより遁れて出づる所  
あり凡生あるもの終あり所詮其期は力及ばず讃州八幡長赤間吉野の奥に合  
戦まで身をまきものと思ひつれども其期あらねば今日迄延ぬ然といへども只今  
最後まで有れるを驚こそ思ふれいざや改出立んとて白き小袖は黄ある大口道重  
の袖を結ひて肩は打こしきのふとて髪を取上げ烏帽子着て六條堀川の  
原後白河法皇の御所へ君判官殿より一兩年住給ひし名残あるを君を見まいら  
さると思ひてそまふてとめかくもあらざやとおもひりの物條を取巻くを自在に  
切ぬけ堀川の館を行ける間も透さず北條の二百餘騎押寄せ先陣は大庭ふみ入て  
後陣は門外はひかへより江間小四郎義時鞠ぐりやを小橋を取て申けるはまよ  
し忠信連も遁るまじさぞ大將軍は北條殿斯や江間の小四郎ありややく出給  
へといへば忠信様の上立するが部とぐむとつき落し手矢を取つて申しけるは  
江間小四郎は申へき事あり鎌倉殿も左馬頭殿の御君達我等が君も御兄弟ぞく  
然るは伊豆駿河の軍兵殊外は狼藉を見え候へ萬事鎮めて剛の者は腹切るやうを  
御覽せよやこきこそ末代の手本よ鎌倉殿も自害の様とも最後言葉をも傳へて

よべと申けきさらば心静ま腹を切らせ給へし手綱を打捨これを見る心やすげ  
み思ひて念佛高聲は三十遍ばくり申て願以此功德往生安樂國と回向して大の刀  
をぬきて左の脇をかはとさしつらぬきて右の脇へするりと引廻し心さきまつら  
ぬきて臍のもとまで播落し刀を挿拭ひて打見てあはれ刀や能々作ると云よりし  
印あり腹を切るは少くも物の障るやうもまゝ此刀を捨さらし腹をへて東國ま  
でとられんす若き者共よき刀ありき刀と評せられんもよしあり具途まで持たさ  
とておりのごひて解し解め膝の下におし隠し又こきぞ判官殿は賜りし御太刀こ  
れを形見に見て冥途も心安し行んとて切先を口まふくみて立上り手を放つて  
つぶりにかかと倒れけりおるべき命かま文治二年正月六日辰刻に遂に人手  
まかりらぎして生年二十八歳にて亡びけり

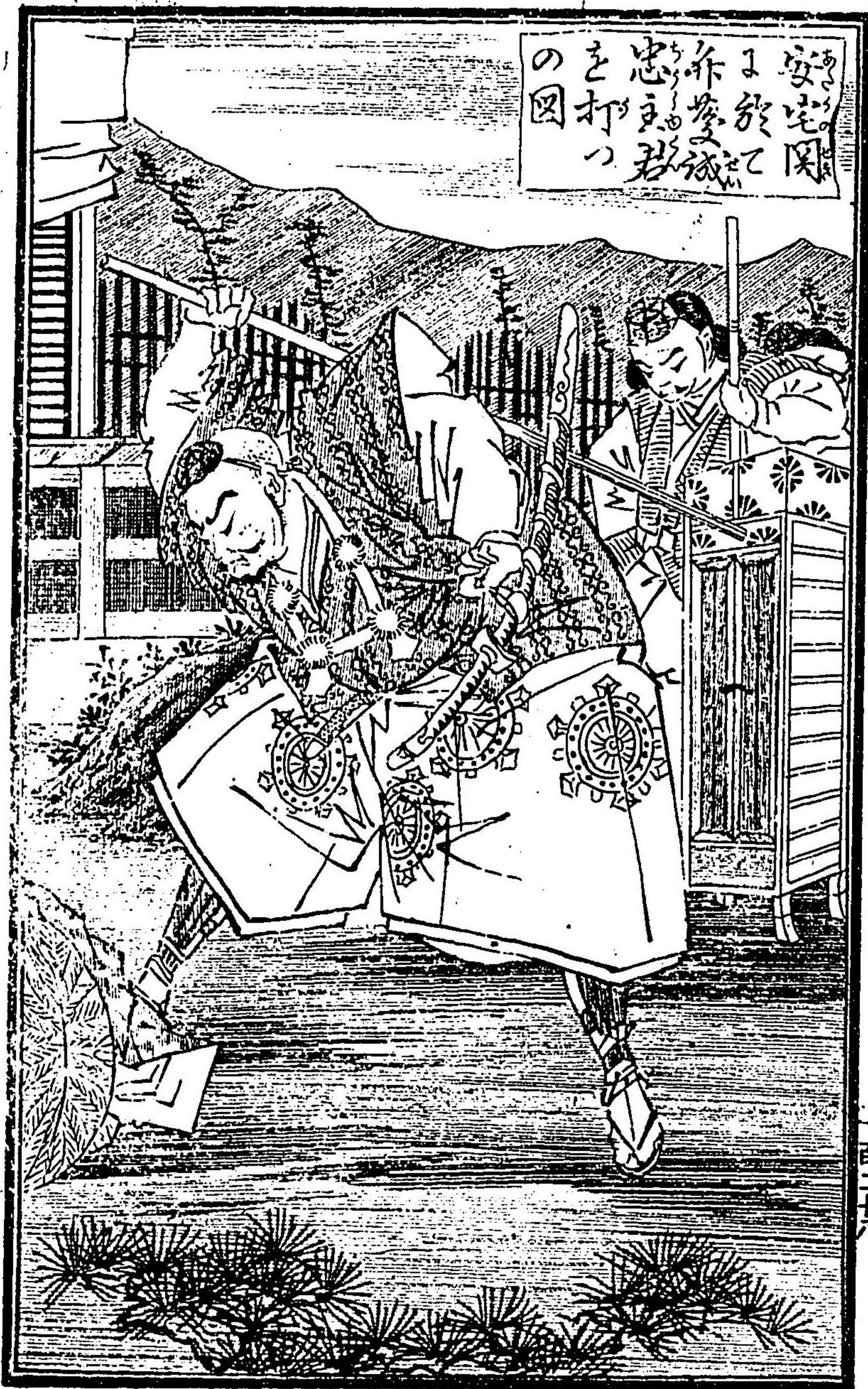
判官義經北國落

文治二年正月の末判官殿は吉野より歸りて六條堀河を忍びあるひは嵯峨を隠れ  
て居給ひ今は都の騒動もいみじけきハ奥州へ下らむとて十六人の家臣ハ一人  
も心かたりにあき北陸道さして下り給ふ南都の觀修房の勸めよまつて山伏の姿と  
あり先達ふは園城寺に仕せられし常陸房又比叡の西塔に居られし武藏房を先



立て近江路より越前の國へかゝり荒乳山の関所の口まで関守を見咎られ武藏  
房さまへ申漸こいと難なく通り横をちなれどもいさや當國に名高き平泉寺を  
拜んとて寺内の觀音堂に着き給ふ大衆どもこれを見て長史の許を告ぐりける  
政所の勢を催し寺中と一同ありて詮議しけるは當時關東より山伏の往來禁制  
とある仰は此山伏ハ一人とも見えぬ判官殿ハ大津坂本より越前國荒乳山を通  
ら札候より承りけりいささまこれハ判官殿にてこそあるらんと大衆競て虜とし  
鎌倉殿へ渡さんとぞ議りけりける辨慶ハ判官殿に向ひて叶はざるまでハ陳じて  
見候ハ人叶ふまじき時ハ太刀をぬき惡む奴原ふと申て飛んで出候は君ハ御自  
害ゆへと申て大衆に問答の問惡む奴をらの声を相圖は耳を立てぞ聞玉ふ心の内  
こそ他いけれ辨慶長史に向ひ様々に陳し申けきハ漸大衆判官殿ハあらざる  
納得し伊勢三郎を使にて長史ハ暇を乞はける心ある大衆陸路にて二三町を送ら  
れける恐しく思はきし平泉寺をも馬の口を遁れしる心地して是早まこそ通られ  
けるかくて菅生の宮を拜し金津に着き玉ふ向ふより唐櫃あまふかへせて牽馬其  
數ありて由々いけよる大名は逢ふりけるこれハいりある人ぞと問ひければ加賀  
國井上左衛門尉とぞ申人之越前あらち山の関所へ行ぞと申ける判官これに聞玉

ひて哀れ遁れんとすきどもものぐをぬべき道まし今ハらくぞと宣ひて刀の柄ふ手  
を打つけ笠まで顔を隠して通らんとし玉ふ折節風烈しく吹笠を吹上げれば  
井上左衛門一と目見參らせせて馬より飛んで下り大道は頭をつけ畏つて申けるハ  
かゝる事こそ候いぬ途中まで逢參らす事不意に存ぞかくいふ我等は井上と申者  
にて程遠き所までこよふへとも申さず山伏の式臺ハ恐れまて候疾々と申て我身  
ハ馬をも騎ぎ送らせり奉り御後の見へぬ程もふれハ各馬を騎りける井上  
ハ道を隔て家の子良從を呼びて申けるいけふ行逢ひ參らざる山伏をば誰と見  
奉るあれこそ鎌倉殿の御舎判官殿は哀れ日頃の様は御下向あらハ國の騷動道  
路ハ大事とこそ成べくこれに憚りて此有様は成給へる事いとありさま討奉らば  
莫大の恩賞も有べきり餘り御いハハハ見通し通し奉るぞと云されハ家の子  
良等これを聞て井上の心底のあえき情も慈悲も染りける人ぞと頼もしく感  
覺ける判官其日ハ篠原は泊り玉ひ明をハ安宅の渡をこえて根上り松に着給ふこ  
れハ白山権現の遙拜所へ加賀國富樫といふ所も近くこけりこゝ富樫助と申ハ  
當國の大名まで鎌倉殿の仰ハ蒙らねども内々用意して判官殿を待奉るとぞ聞へ  
ける武藏房申けるハ君ハこれより宮越へ渡らせおはしませ辨慶ハ富樫城の分野



安宅の関  
に於て  
赤松の  
忠臣  
を打つ  
の図

と一見せむやと只ひとり行ける富樫の城下とされ三月三日の事され小弓の遊び鑓馬鶏合せして興酒宴の中より武藏房城門の内み入つて大聲を上げ修行者にて候と申ける家中の面々聞耳立て酒宴も不興ふされ狼藉の至り早々罷出られ候へと腕を取つて押せども少しも動かず返つてこぶしを握り散々打つられあるひハ髪を切られ烏帽子を落され逃走此修行山伏狼藉をるぞとて大騒動を富樫助ハ大口はき烏帽子着て手鉢を杖につまき侍所み出さける辨慶と札を見て御らんの如く御内衆修験者み向ひて不敬少あうらすとて頓て椽の上ま登りける富樫是を見ていかる山伏ぞといへむ是ハ南都東大寺の山伏まで大佛殿再建の大勸進巡行の山伏と答ふいり御身一人ハおはするぞ辨慶答て早同行達ハ宮越の方へ通られは是ハ御内勸進の爲ま参りて師の御房美作の阿闍梨と申は東山道とへて信濃國へ下り候此僧ハ讚岐阿闍梨と申て北陸道まかり越後ま下り候御内の勸進ハいりまやと申けま富樫よくこそ御出候へとて叮嚀を饗應し加賀の上品五十疋女房の方より罪障懺悔の爲みとて白袴一腰八つ花形を鑄る鏡其外家の子良從女房達嬪女に至るまで思ひくし勸進み入りて冥帳につく都合百五十人の勸進の物ハ今日給はるべく候へとも來月中旬は上り候はんづれ

バ其時玉り候はんとしてみまし預け置てぞ出さける馬まのせられて宮越までおくられけり夫より大野の湊まで判官殿み會ひより明札ハ如意の城ハ船己よりいなるわし守を平權頭とぞいひける罷出て申やうこれハ越中の守護近き所まで候へハ兼て仰と蒙り候山伏通られ候ハ領主へ子細を申さて渡しよらハ辟事まであるぞと仰付られて候既ふ十七八人御目より候怪しと思ひ参らせ候守護へそのわしを達せんといひければ武藏房聲をあらけ羽黒山の讚岐房を北陸道にて見知らぬ様やあるべきと申ければ實々見参らせよるやうみこそ一昨年も御往來とて御札を下し給はり御坊やと申ければ辨慶嬉しげみよくも見らせりといと少し顔色和らげられ權頭又見答てあの先へ立ておはるむら千鳥のすり衣めしよるこそ怪しと思ひつれと申せむ辨慶あれハ加賀の白山よりつれより御坊よりあの御坊かへみ所々にて人々みあやめられ道の妨げとあるこそ詮ふけれど腹立よる体まで走りより船をよまへて御腕を掴んで肩より引け濱まで走り上り砂のうへみかバと投げつけ腰の扇みていよハいげぬあく續け打みさんぐま打りける見る人目もあてられ涙を浮てひくへ居る權頭こきを見て都て羽黒の山伏はと情なきものハあうりけりあれ程痛はし打玉へるハおど判官殿

みてハ曾てより詮ずる所是ハ某グ打參らせよる杖みてこそあれく、る御いよハ  
しき事こそあらめとこれよめ給へと船とさしよする楫取のせ奉りて云けるハ  
はち船賃ありて越給へと云へバ何のあらひに羽黒の山伏船賃ありよるぞと云  
けれバ目頃取よる事ハあけきども御坊のあまり放逸ふおれバとて船をこ  
さす辨慶和殿のやうみわをらふ當らハ出羽國へ一年二年の内ハ來らぬ事ハよ  
もあらハ坂田の湊ハ此少人の父坂田次郎殿の領之只今の通當り返さんぞる物と  
ぞかどいけれ共權頭何とも宣へ船賃とらでいえこそ渡きまといへバ辨慶さき  
ふとられよる例ハあけれども此人みて辟事よるよよつて取らるゝありとてさ  
らバそきよび候へとておのが兜巾鈴がけをばとらせけれバ權頭法子任せてとつ  
てハ候へどもあの御房のいとほしけれハ參らせんとて判官殿に奉りけれ武藏坊  
是を見てかゝかり袖をひかへておこがまりや只あれもこそも同ト事よと私語  
ける六ぼうろを越名古の林をさして歩給ひける武藏坊忘れんとすきども忘れ  
す走よつて判官殿の御袂を取聲を上げてよくく申けるハ何まで君を構ひ參ら  
せんとして現在の主君を打奉るこそ冥見の御罰も恐ろや八幡宮も許し主へ漢間敷  
世中とてさしも猛き辨慶もふし轉び泣けれバ侍士も一所ふ並居て消入るやうふ

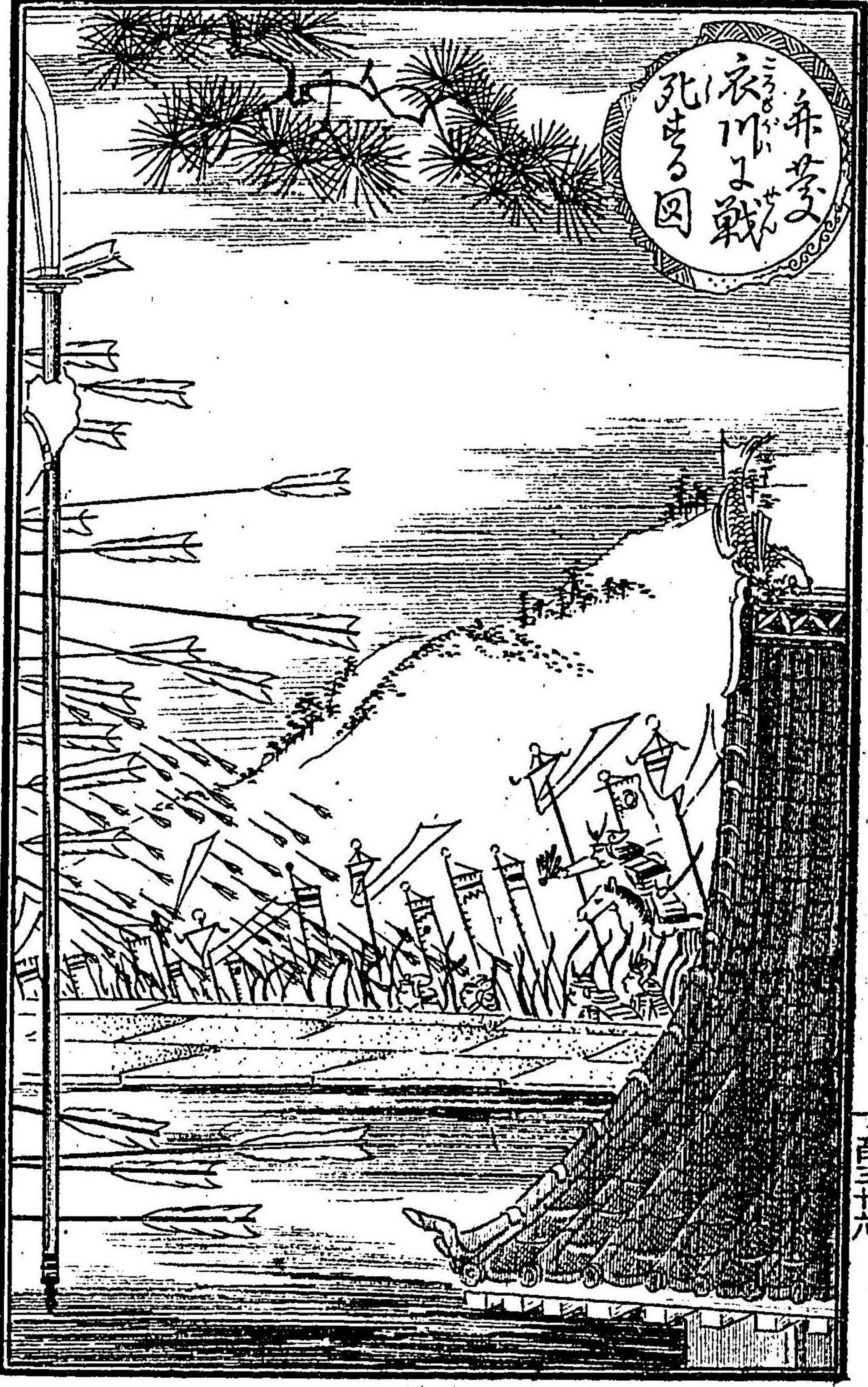
哭いより判官こそも人の爲あらずか程まで武運のつゝなき義經ふかく志深くさ  
めんく行末までもいかゞと思へハ涙の籠津瀬御袖をひよ給ふぞ理りよる此  
御詞を聞ておのゝ決のかい問もふりけりかく日敷を借りけれハ越後國直  
江の津にて國府の守護職ふ笈を授されこゝも武藏坊計略さて安く打過野  
を山くれて其日栗原寺に着給ふ夫より龜井六郎伊勢三郎を御使として平泉へぞ  
つかはされけり

義經入高館城

奥州の大守委衛判官殿の御使と聞急き對面を此ほど北陸道さかゝりて御下りと  
ハ内々承はり候ひつれども一定仕らざるよつて御迎をも參らせよ越後越中こそ  
恨あらめ出羽國の者共におくられさせおはし候はざりけるぞ急ぎ御迎ま人  
を參らせよとて嫡子基義の冠者をよびて判官殿の御迎を參れと申けしハ泰衛百  
五十騎よてぞ參りける委衛さうかく我館へハ入を參らせよと月見殿とてつね人  
も通ハぬ所よきへ奉り日かふ饗應斜からよよは兼ての約束されハ名馬百匹鎧五  
十領征矢五十串弓五十挺御下の領所ハ國の中にてよき郡ふ千八百町つゝ有る  
を五郡をぞ參らせける侍まハ勝れよる庄配分いよけり折々ハ何方へも出て

慰王へと骨強き馬十四匹づゝ馬具を揃へて心ざりを運びける所詮今ハ何ぞ憚る  
べき只思ふまゝに遊ばせよとて兩國の大名三百六十人と勝て日々城番をぞろ  
よへへるやぐて御館作れとて秀衡が城より西にあたりて衣河とて要渾よき所は  
御館を作りて入つてまつる城の体を見るに前ハ衣河東ハ秀衡が館より西ハ洞空  
が窟とて嶮岨ある山につゞき入りかくの城廓を構へて上見ぬ鷲の如くまておハ  
しはりきのふまでハ空山伏けふいいつゝか武威かゝやきて陸奥出羽二州の將軍  
とまりて榮花一時開きおハしけるかくて其年も暮て文治三年に成りけり判官殿  
高館にうつらせ玉ふて次信忠信をばじめ西海にて討死しける者ども忠の淺深ま  
よらず冥帳に入札吊らへと仰出さる弊慶涙を流し誠は延喜天曆の帝まも比せん  
やさらバ貴僧を請じ佛事を執行ふべきよし秀衡に申けをバ入道も御芳心を感じ  
きおハち佐藤兄弟の母の方へも御使ありけをバ孫ども後家ども引くして參る判  
官殿御こゝろざりの餘り御自筆に法華經を遊ばし吊らせ給ふ人々有難きまめ  
しありとて感心膽み銘づける佐藤の尼公申されけるハ兄弟の者の御幸養實は身  
み於て有難き御心ざり又ハ死後の高名何事は是みこえべし是はとの御心ざりを  
此世も存へて候ハバいかせり承ふ思ひ參らせんと彌涙まむせひけるされど

も今ハ思ひ切參らせ候幼少者共を相續きて君へ奉らんいまゞ童名にて候と申け  
れバ判官それハ秀衡の名をもつぐべけれども兄弟の者の形見ふれハ義經名をつ  
くべしさりまがら秀衡の聞せよと御使有けれハ入道内々申上度折ふりに候恐れ  
入水と申上けれハさらバ秀衡はからひてと宣へハ承て髪取上鳥帽子着せて御  
前も畏る判官殿怡悦し給ひ實に構檀ハ二葉より芳し次信が子をバ佐藤四郎義信  
忠信が子をバ佐藤四郎義忠と名付給ふ尼公斜めらさ悦びいりみ和泉三郎兼て申  
せし物我君へ奉られと申けをバ佐藤は家に傳れる名劍を存る其外諸士達ももそ  
れしつゝも參らせて尼公まはも口説申されけるハ同ぐハ兄弟の者此度御とも  
して下り御前ふて孫どもに鳥帽子着せまむいりバかり嬉しうらまどと泣涕こがれ  
けれハ二人の嫁もあま人の事を一は思ひ出り別れし時の如く聲もあまぞ悲  
しみけり君も哀れし思ひ御涙せまあへず秀衡をばじめ御前ふ並居る人々たもと  
を顔み當ておのゝあみどを流しける判官益とり上げ給ひ義信も下さる命の恭  
拜當座の會釋まことにおとあゝ見へけれハ次信もよくも似たるもの哉汝が父  
八幡まで義經が命ふかはりこそ源平兩家の眼を驚かしたる事さびあらい漢  
の紀信ふめおとるまゝ主君に心ざし深き者之後世忠義の鏡あると我家臣とあす事



則我本懐也けふより義經を父と思へと仰らきて御座近く召せおくれの髪を撫さ  
 せ給ひ御涙せきあへき其時龜井片岡伊勢屋權頭兼房あらしき辨慶をはじめとし  
 て聲を立てて泣きよける暫く有て御涙をとめ義忠に御盃を下され汝が父よしの  
 山よて大衆追懸たりしかば義經をかむひて只一人嶺止まらんといひしを義經  
 もといめん事を悲しき一所に落んと千度百たびいむしに侍の詞い給言にも同じ  
 汗の如しと既自害せんとせしまし力及むず一人峯は殘し置りしし數百人  
 の敵を纏六七騎よて防ぎ刺忠神のやうに謂せし横河の覺範を討取都は登り江間  
 小四郎を引うけ其所も伐ぬけ六條堀河の古き宿所歸り來て義經を見ると思ひ  
 て爰よて腹を切りし志をせといひ古をといひ兄弟の者の芳志いつの世かい忘る  
 べき例すくまき忠臣汝も忠信は劣るまじき者哉とて又涙ましくけり判官殿伊  
 勢三郎に命じて小櫻威卵の花威の鎧を成人は下させけり尼公疾をとめてあり  
 有難の御説や侍剛も功なるべきいなし汝等も成人仕り父どもが如く君  
 の御用は立て名を後代に上よ不忠を仕らば父其は劣せる者とて友傍に笑ひを  
 後指をさしれん家の瑕瑾なるべし御前よてもうきぞよく承たまはりといめよ  
 とぞもうしける各々古きを聞て兄弟剛なりしも道理らなや只今尼公のもうし

やうさしも武き人かるとおのく感入まける古きより前きは忠信の首を鎌倉  
 へ送る時頼朝卿宣まひけるいか程の忠臣の首を大路に晒す事恐をあり却て惡魔  
 と成て障碍をなすものあり鎌倉聖長壽院は墳墓を築き別當僧は命じて一百三十  
 六部の經を書寫して供養せらせけりむらし漢の高祖の時敵の臣田横討負て海鳥  
 に逃て自殺す高祖敵あら忠心を賞して王者の禮をもつて歸葬し祭らるこれら  
 の例よよるならんや

源義經渡海蝦夷

文治四年十二月十日の頃より秀衡入道重病をうけて日數重り弱り行の老婆仙鶴  
 が術も叶はず同廿一日の曙に遂にはかなくなりぬ一門泣悲しむといへ其らひそ  
 なき判官殿此よし聞大よおどろき玉ひ馬は一鞭を進めて急きおひして空き死體  
 よ抱きつかせ玉ひて仰せらせけるの遙の境を隔て是まで下る事も入道を頼てこ  
 そ候へ父義朝よ二才にてわかき母の都はあひすせども平家に渡らせ玉へい互  
 に心よからず兄弟多しといへども所々散て逢事もなく利憐をたせ給ふべき  
 頼朝よ不和なりいかなる親の歎き子の別をといふともこれよい過じと悲しき  
 給ふ事限りなし只義經が運の極る所とてさしも猛き御心よ引かへて深くぞ歎か

せ給ひけるかくて入道死しけども變る事なく兄弟の子ども打ちへく判官殿へ出仕して其年も暮まけり鎌倉殿より奥州の大守秀衡入道死去しけると聞て泰衡に仰遣させけるやうい密に義經を討候い常陸國を賞として遣すべきやう使あせば一腹の舍弟和泉三郎又錦戸比津目五郎と各々心々は成まけり六親不和まして三寶加護ふしといこをらをいふなり和泉三郎軍勢を數多隨へ不意は高館城へ押寄四方を取圍て一度に火をうけ焼討まぞしたりける此度運の窮をとて義經良從共腹かき切て焔の中まぞ飛入給ひける辨慶も衣川まで敵を防ぎしかども黒煙よもせんで其儘死したりけるまを武藏坊辨慶衣川の立往生とぞ云雖しける泰衡判官殿を安く亡し鎌倉へ訴けせし頼朝卿仰せけるい抑かをらひ不思議の者共哉頼て下りつるを討亡すのみならざとせし現在頼朝が兄弟と知りながら院宣あせびとてさうふく討たるこそ奇怪なれとて泰衡をはじめ宗徒の良從まで首を斬て梟らきけるさむい故入道遺言の如く錦戸比津目兩人の兩關を閉き泰平和泉判官殿の下知は隨ひ軍をせむ争かやうは成果へき親の遺言を背といひ君に不忠といひ惡逆不道を起して命も亡び子孫絶て代々の所領他人の寶とあるこそ悲しけむ侍士たらん人い忠孝を専とせざんばあるべうらむ口惜かりしものと

もより抑伊豫守從五位上源義經朝臣い古今名将にて磔うつ童子も其英雄を賞する事年久し終は文治五年御歳三十三才にて生害し給ふ或諺にい判官殿武藏坊常陸房其外良從をつれて蝦夷千島へ赴き給ひてかの國を伐從へ將軍と成給ふ今も宮殿を營て義經大明神と崇祀るとぞ聞えし蝦夷の野作と譯す地理風流よして種々の産物あり北海より東室韋ヲロシヤ。リウスラント。まきを莫期未亞達韃と稱す蒙右哈密こをいよしへの伊吾盧の地唐の伊州なり又兀良哈の類い大濤は屬すこれを支那達韃と稱するなりヲロシヤ蝦夷人これと呼んでアカ人といふ漸州カラヲト和俗これを稱してみな與蝦夷といふ此ほとりまで伐從がへ領せらるしよやあらん

法皇大原行幸

去る程は鎌倉より北條時政上洛して平家嫡孫六代御前を搜出し既誅すべきを文覺上人廿日の延引を申しれ鎌倉へ下りける時政都はありて廿日も過けを鎌倉へ連下らんとて日敷をふりて東海道沿津の千本松原にて誅すべきと既六代を敷草の上は置郎等は太刀とりをさせらる所は文覺鎌倉より命乞して六代御前を都は連を歸り給ひぬ洛北大原寂光院は健禮門院幽なる庵まします所へ後白



河法皇入御し給ひむろし今の御物語遊むしかくを詠じ給ふ  
 ○池水は岸の青柳散しきて涙の花こそさかり成けむ  
 西海に漂泊しひしを三惡道よよせて六道輪廻の有さまを御物語なごき今生の  
 恨い一旦の事善知識に遇ふいこそ莫太の因縁をかしの如く后妃の位にましま  
 さい争法性常樂を経させ玉ふべき源平兩家の盛衰より憂目を御覽じけるい  
 偏は往生極樂の勝因のきさし也けるにこそと心ある人のみま貴を敬ひける抑右  
 大将頼朝卿の治國平天下の計をめぐらし平氏の恨を義經一人は蒙らしめ追討の  
 宣旨を蒙り滅せし事い深き思慮ある計界とぞしらせける文道いちじるくして  
 まどろ北條梶原如きの讒を用ひ玉いんや今六百餘歳の後武門の繁榮い此將軍の  
 胸中より出たる籌の全とぞ思ひをける

源平盛衰記圖會

明治十九年十一月三十日 出板御届  
 公 年十二月二十一日 刻成 発兌

定價金七匁

編輯人 平山 菊 城  
 上京区東六組丸屋早十二番戸  
 画 工 野村 芳 國  
 寺甲通綾小路上ル  
 京都府平民  
 出版人 佐々木 慶 助  
 下京区第五組中町第十七番戸  
 京都府平民  
 出版人 中村 朝 吉  
 上京区第三十組丸屋町廿二番戸  
 專賣人 佐々木 惠 美 香  
 三条通富小路東へ入



